

英雄が、世界を壊す。

# プロローグ

その日、綾神学園のグラウンドでは一学期の始業式が執り行われていた。

雲一つない満点の青空の下。整然と列をなしているのは、それぞれ目を引く制服に身を包んだ学生たちである。女子は赤を基調としたドレスのようなもの。男子は白を基調とした軍服のようなもの。紅白が並ぶ鮮やかな光景は、遠目に見れば祝典に掲げられる錦のようだった。

生徒たちの側には教師たちが一列に並んでいる。生徒も教師も皆が皆、口を噤み、ただ前方を睨んでいた。

彼らの視線を集めるのは、前方に置かれた鉄製の朝礼台——その上に立つ麗人だった。

赤い髪を一つに束ね、艶やかな長身にスーツをまとった女性である。薄く色の入った眼鏡の奥には、冷淡な瞳がわずかに揺らぐこともなく、凛として潜んでいた。

彼女の名前は化野早苗。この綾神学園高等部の教師である。

化野はスーツの胸元から数枚の紙を取り出し、グラウンドを眺め回して口を開く。

「諸君。本日もまた、理事長は不在である」

淡々と事務的な声色でそう告げ、紙を広げる。

「よって新学期の挨拶は、今回もまた私が代わりに読み上げさせてもらう。心して聞きたい。……『おはよう生徒諸君。本日から新しい年度が幕を開けることとなった。』」

これまで以上に勉学に励みましよう。

心身ともに、健やかな学園生活を送りましよう。

ありふれた言葉の数々。それをその場の全員が例外なく真剣な面持ちを浮かべて聞いていた。

刃りに充ちるのはどこか静謐な空気である。

誰ひとりとして私語を漏らさず、咳払いの音さえしなかった。

一種の宗教儀式めいた荘厳さが漂う中。

「ふわあああああ……」

野々柳竜司は、緊張感のかけらもないあくびを大声で披露した。

瞬間、静寂が揺れる。だが、手紙を読み上げる化野はかすかに声を震わせもしなかった。

周囲の生徒たちも何ら反応を示さない。

かわりに満ちるのは身じろぐことすら躊躇われるような、汚泥にも似た粘つく気配。日光がわずかに強まり、大気がかすかな揺らぎを帯び始める。

重々しい空気の中、竜司は顔をこすってぼんやりとつぶやく。

「あー……眠い」

「ふふ」

そんな竜司に、側の少女がふんわりと微笑んだ。

一級の彫刻品めいた美少女だった。腰まで届く、ゆるくウェーブのかかった銀の髪。血潮のように赤い瞳。きめ細やかな白い肌に、幼さの残る愛嬌のある顔立ち。稀代の芸術品が命を持ったと言われても万人が納得しかねないほど、その少女は煌めく美しさを有していた。

ツーサイドアップにした髪をふわりと揺らし、少女は鈴が転がるような声でくすくすと笑う。「ちょっとくらいなら、眠っててもいいよ、りゅーくん」

「んー……そうだなあ」

ぼりぼりと頬を掻き、竜司は自分の顔を覗き込む少女に、竜司は笑って答える。

「ま、少しくらいなら我慢するさ。ありがとな、リリティカ」

「えへへ、どういたしまして」

そう言う少女——リリティカはいたずらばい微笑みを浮かべてみせる。

二人がいるのはグラウンドの中央。

生徒たちが居並ぶその中心部にある、奇妙な空所だった。

半径五十メートルほどの円形のスペースである。その場を取り囲むようにして『KEEP OUT』と書かれた黄色いテープが張り巡らされ、まるで事件の現場であるかのような物々し



さを醸し出していた。中にいるのは一人の少年と、一人の少女。竜司とリリティカ。たった二人だけである。

二人も周囲の生徒たちと同じように学園の制服に身を包んでいた。ただし竜司の制服は他の生徒とデザインこそ同じものだが、色は白から程遠い黒を基調としたものだ。見渡す限り広いグラウンドの中で、その色の制服を着ているのは竜司のみである。

上着のボタンを留めることなく、中の赤いシャツを堂々と見せるその着こなしは、一見すると素行不良の学生だ。それでも人懐っこそうな顔つきのおかげで、さほど印象の悪さを感じさせない。

カラフルなピクニックシートを広げ、その上で竜司は仰向けに寝転がっている。

そして、リリティカはそんな竜司の頭を自分の膝に乗せていた。いわゆる膝枕である。

「ところでりゅーくん。この眺めはどう？ 絶景でしょ？」

「眺め……？」

竜司は視界に入るものを確認する。

曇りのない青空と、眩しく輝く太陽。そしてリリティカの顔。以上。

「別に普通の眺めだけど？」

「ええー？ なんだかすばらしい、山脈っぽいものが見えてると思うんだけどなー？」

リリティカは腕を組み、不自然なほどに背を反らせて胸を張る。

何を主張したいか丸分かりだった。ただ残念なことに。

「お前のそれは……山ってーより平原だろ」

「むっかー!!」

べったんな事実を突きつけてやると、リリティカは怒りを顕わにして目を吊り上げた。

奇跡の美少女然とした容姿でそんな子供っぽいことをするものだから、怖さよりもむしろ可愛らしさが際立った。だから睨みつけられても、竜司はしれっとしていられたのだが。

「平地だって言うのならー」

「うおう!？」

突然シートの上に転がされたかと思えば、リリティカが覆いかぶさるようにして上に乗ってくる。竜司は目を瞬かせながらも起き上がろうとするも、がっしり抱きつかれてしまつて成す術もなかった。

男の自分にはない柔らかさと、火傷しそうなほどに熱い体温が痛いほどに伝わって、蜘蛛の糸のように細い髪が頬を撫でると、シャンブーの甘い匂いが鼻腔をくすぐった。

見慣れているはずのリリティカの顔も、さすがに数センチの至近距離で見つめてしまえば、十六歳の健全な男子としてはドギマギしない方がおかしかった。

言葉に詰まる竜司にリリティカは顔を近づけ、不敵な笑みを浮かべてみせた。

「うふふー。どう？ これでもまだ胸がないって言えるのかな？ うりうりー」

「おつ、押し付けてもないものはねえんだよ!!」

「ええー、じゃあ開拓してみる? りゅーくんなら……いい・い・よ?」

「実る可能性のない土地に手出しするほど俺は暇じゃねえ!! いいからどけ!!」

とは言うものの、決してリリティカの胸が皆無なわけではない。

小ぶりとはいえ、その弾力は本物だ。暴力的だった。ふにふにとしたその感触ブライスレス。押し付けられれば当然意識するし、心が無性にざわざわした。

ぎゃーきゃーとじゃれ合い、ふざけ合う二人。

そんな中でも、壇上の化野は滞りなく演説を続けていた。

そして生徒も教師も、誰ひとりとしてそのスペースを、その二人を気にかけない。

まるで世界にとつての異物であるかのように、知覚することを認めない。

何故なら二人は、彼らにとつての宿敵だった。

たった二人だけが空気を読まない時間が続き、やがて化野が理事長からの手紙を読み終えた。

「……以上。それでは本年もまた、この学園で己が使命を果たすべく、邁進してくれたまえ」  
そう締めくくると化野は書状を懐に戻し、あらためて生徒や教師たちを見渡す。

その場の全員が真剣な表情で、化野の次の言葉を待っている。

「もお、りゅーくんつたら恥ずかしがっちゃつてえ」  
「だーからー!! 人の話を聞け!!」

竜司とリリティカを除き。

だが化野は動じない。生徒も、教師も誰一人として動じない。

「では諸君……かつて異世界を救いし英雄たちよ。我らが敵を……」

化野がおもむろに右手を掲げ、人差し指を竜司とリリティカに向ける。

高等部二年S組担任、化野早苗——二つ名は《天獄燭台の番人》。

十年前、異世界カリユキスに召喚され、墮神戦争を治めた偉大なる業火の魔女。

化野は自らの力を指先に込め、練り上げ、舌に乗せて解放する!

「討ち滅ぼせ!!」

その瞬間、竜司とリリティカの場所に、突如として天を衝くほど巨大な火柱が立ちのぼる。  
数多の魔物を屠り、カリユキスを支配していた墮神をも焼き尽くした彼女の切り札。

《断獄台》。

次元すら歪める凄まじい熱の塊に二人は吞まれ、その姿は紅蓮の向こうに消えてしまふ。  
その炎に間髪いれず。

「うらああああああ!!」

気合の大声とともに、生徒たちの間から大柄な男子生徒が躍り出る。

高等部三年A組、赤守晴人——二つ名は《武勇城》。

異世界ハルバートの弱小国家グランフォールの巫女に導かれ、魔道国家ダグラムからの長年にわたる侵略戦争に終止符を打った若き戦士。

彼が両手を振り上げると、その頭上には何百本という銀の剣が現れた。

「くらいやがれ! 星・霰!」

銀の剣は一斉に空を切り、けたたましい金属音の合唱を伴い火柱めがけて飛翔する。

ダグラムの操る何万という死霊兵たちを、その魂の呪縛ごと断ち切った一騎当千の大技だ。また、そのすぐ後に。

「……よ、……き……いざ、な」

小さな、確かな力を帯びた声が生徒たちの中から漏れ聞こえる。声の主は小柄な女子生徒だった。

中等部二年B組、秋仗千人——二つ名は《魔偽科》。

異世界ビ・スクリュの狂科学者ラブストレンジにより、禁忌とされていた魔道改造手術を施された生ける兵器。同じ境遇の兵器たちと元凶のラブストレンジを掃討した、力ある言葉。彼女が静かに紡ぐこと、周囲に肌がひりつく威圧感が満ちた。

「……てんみん陣術第五の相」

瞬間、火柱の真上に、赤錆にまみれた異形の機械が出現する。

その巨大な機械はギザギザと耳障りな音を立てて鳴動し、白い光を帯び始め——

「【陥】……です」

機械から眩い閃光が放たれ、耳を劈く轟音とともに化野の生んだ火柱に突き刺さる。その正体はブラックホールすら貫き壊す、でたらめなエネルギーが凝縮された雷の大槍である。

容赦のない猛攻の連打。

まぎれもない殺意を持った異能の数々。

世界を救いし英雄たちの、持てるすべての力を賭した大技。

それらを受けて無事でいられるような生き物が、存在するはずもない。

「ひどいなあ」

存在しない……はずだった。

突如として火柱と雷が幻のように掻き消える。

飛びすぎる剣も、すべて慣性の法則を無視してその場に虚しく落下する。

くすぶる煙の中、そこに平然と立っていたのはリリティカだった。

彼女を中心として、彼女を護るようにして、薄い黒色の障壁がドーム状に出現していた。名を、《禍の紡織衣》。

リリティカが持つ、あらゆる異能を無に帰する、絶対防護の力である。

その外側の地面はまるで地雷でも炸裂したかのように大きく抉れ焼け焦けているが、内側にいたリリティカと、その足元であぐらをかく竜司には、かすり傷一つついていなかった。

「《禍の紡織衣》……解除」

リリティカがつぶやくと同時に、黒の障壁は音もなく消失する。あとには熱気すら残らない。有無を言わせぬ威圧感をまとい、リリティカは疎む赤守に微笑みかけた。

「人がいちゃいちゃしてるところを邪魔するなんて……悪い子にはおしおきが必要かな？」

「ちっ……化けモンが……！」

赤守は吐き捨てるように言うのと踵を返し、生徒たちの間に紛れてしまう。

それを見送り、リリティカは「あーあー」と残念そうな声を上げた。

「逃げられちゃった。じゃあ、誰か代わりにおしおきされたい人はいるかなー？」

答える声はない。

武器を顕現させる者。

力ある言葉を紡ぐ者。

ただ見守るだけの者。

ただ三者三様に、二人をまっすぐに睨みつけるだけだった。

ようやく彼らは竜司とリリティカの存在を認知した。

自分たちが討つべき敵として。

緊迫し、凍りついた空気の中。最初に動いたのは――

「おっと」

「ありや？」

竜司がリリティカの目の前に躍り出る。

リリティカが不思議そうな声を漏らすも、竜司はお構いなしで。

「セコい真似してんじゃねーぞ、つと」

サイレンサー付きのライフルから放たれ、いましがた素手で掴み取ったばかりの銀の弾丸を、竜司は力一杯に飛んできた方向――約十キロ離れた山地に向けてぶん投げる。

数学教師、棧坂影時――二つ名は《欲の眼》……の悲鳴と、その得物が碎けるのを、竜司は常軌を逸した視力と聴力とで確認する。

これで制裁完了だ。

それを見ていたリリティカは、竜司に困ったように笑いかける。

「あれくらいちゃんと防げたし、避けることだってできたよ？ でも……りゅーくんはいすきー!!」

「ああもういちいち抱きつくな!! いいからとつとやるぞ!」

「もう、素直じゃないんだから。でも、りゅうくんの仰せのままに!」

リリテイカは竜司の右手を両手で包みこむ。そして、祈るように目を閉じた。すると彼女の体から、『禍の紡織衣』と同じ闇色のオーラが立ちのぼる。

「出番だよ。アウスレーゼ!」

リリテイカの力強い呼びかけに応え、竜司の真上に奇妙な大剣が現れた。

その剣は竜司の背丈をしのぐほど長く、その胴体よりも太く、縮尺が狂ったかのように巨大である。無数の傷が刻まれ欠けの目立つ刃は、竜の顎を思わせた。

そしてなによりも目を引くのが、剣身に何重にも巻きつけられた、銀に輝く鎖だった。

悍ましいほどの邪気。生きとし生ける者すべてに向けた敵意。希代の名画にヘドロをぶちまけるような、冒瀆的な嫌悪感。ありとあらゆる負の念がない交ぜとなり、それが形になったような……禍々しい魔剣である。

竜司はその大剣——アウスレーゼを掴み軽々と肩に担ぎ上げると、取り巻く周囲の者たちを睨めつける。

「ようよう。さつきはよくもやってくれたな、と言いたところだが……ま、許してやるよ」  
そして、獐猛な笑みを浮かべてみせるのだ。

「どうせお前らは俺に勝てないんだ。だからせいぜい全力で手の内を見せてくれよ。俺はそれ

以上の力を軽く出して、お前らをちゃっちゃと絶望させてやるからさ」  
「……!!」

竜司の安い挑発に、真っ向から噛みつく者はいなかった。

だが、周囲の大部分の者たちがその言葉を受け、自身の得物を握る手に力を込め、竜司を睨む。彼らの反応が上々で、竜司はますます笑みを深めるのだった。

「さて、次に先陣を切ってくれるのはどのど——」

「宿れ閃光!! クラウソサス!!」

何の前触れもなく、澄んだ殺気が竜司の背後で生まれた。

素早く振り返る竜司の視界に、一人の女子生徒が飛び込んでくる。

それは柘榴石のような煌めく髪を持つ、凜とした面持ちの少女だった。

少女はほのかに輝く細身の剣を下段に構え、まっすぐに竜司たちを睨んでいた。

(ん……?)

竜司はその少女に、かすかな引つ掛かりを覚えた。しかしそのことに考えを巡らす前に、少女に触発されるかのようにして四方八方から新たな襲撃者が飛び出してくる。

武器を携える者、呪文らしきものを詠唱する者、はたまた素手の自然体でいる者など。実に様々な猛者たちが竜司たちに向かってくる。上がるのは怒声。巻き上がるのは砂塵。天地を揺るがす勢いで駆けるそれら全員の眼には、純然たる殺意の炎が灯されていた。



しかし竜司は動じない。むしろぐりと襲撃者たちを見渡して、余裕の笑みさえ浮かべてみせる始末だった。

「よし、御一行様だな。そんじゃ行くぜ！」

そう言うが早いか、竜司はアウスレーゼを両手でしかと握りしめる。

そして剣身を鎖で封じられたそのままで、ただまっすぐに振り下ろし――

「吹っ飛びやがれザコどもがあああああああああ!!」

アウスレーゼの剣先で、地面を軽く叩いた。

空気だけを斬り裂く、名称すらない、無意味な一閃。

しかし一拍の間において、アウスレーゼの剣先から膨大なエネルギーが生まれた。リリティカの《禍の紡織衣》よりも色濃い、ただただ闇を凝縮させたかのような黒の力。それが世界を揺るがすほどの爆発を引き起こす。

黒のエネルギーは地面を割り砕き爆走し、竜司たちに到達する寸前だった魔法攻撃のすべてを、殺意を持って進軍していた者たちすべてを吹き飛ばす。耳を聳る轟音を上げて縦横無尽に荒れ狂い、その他大勢を無差別になぎ倒す。

その様はまるで、獲物を求めて疾駆する獣の群れのようなだった。

まるで地獄。

まるで圧倒的な、暴力的な力。

あちこちから悲鳴が上がり、人々が怒声を上げて逃げ惑う。

その凄惨な光景を前にしてリリティカが染しげな声を上げた。

「おおー、さすがりゅーくん。圧倒的だねえ」

「俺がすげーんじゃねえよ。あいつらが弱すぎるだけだ」

「ふふ……し・か・も」

リリティカはいたずらっぽい微笑みを浮かべ、竜司を指し示す。

「あの状況で女の子一人を助けちゃうんだもん。強い上に男前すぎるだなんて！ それでこそりゅーくんだよ！」

「はっ、当然のことを言うなっつての」

茶化すリリティカに、竜司は事も無げに笑ってみせた。

竜司の腕の中には、先ほど先陣を切った女子生徒がいた。体を強張らせて目を丸くする女子生徒だが、無論のこと偶然竜司の猛攻を避けて懷に潜り込んだというわけではない。

「おい、大丈夫か？」

「い、っつ!!」

声をかけたその途端、女子生徒は声にならない悲鳴を上げて竜司からばつと飛び退いた。そうして距離をとり、剣を構えて威嚇する。

そこであらためて、竜司は彼女のことをじっくりと観察することができた。

整った顔立ちに、二つくりにされた綺麗な長い髪。竜司とリリティカを睨む瞳からは、力強い闘志を感じられた。

リリティカに負けず劣らずの美少女だ。だが、リリティカとは比べ物にならないほど胸は豊かである。その上全体的なプロポーションも完璧。ただし残念なことに……。

竜司はそのことに気付き、顔をしかめて視線をさっと地面に落とす。

しかし女子生徒は竜司の変化を気にかけることもなく、怒気を顕わにして声を荒げるのだ。

「な、舐めた真似をしてくれるじゃない……敵を助けるなんて一体どういうつもりよ……!」

「いやだって、なあ」

それに竜司は目を逸らしたまま、ぼつりと。

「勢いよくすつ転ぶようなマスを倒しても、あんまスカツとしねーっていうか」

「つ~~~~~~~~~!」

女子生徒が顔を真っ赤にして言葉を詰まらせる。

その足元には太陽の光を受けて眩い輝きを放つ、銀の剣が何本も転がっていた。先ほど赤守という三年生が放ったものだ。

彼女はそれらのうちの一本に躓いて、竜司の目の前で思いっきり転倒したのである。竜司がアウスレーゼを振り下ろしたのと、ほぼ同じタイミングで。

そんな間抜けな展開に驚いて思わず助けてしまっただけだった。竜司にとっては些細なこと。

だがしかし、もつと別に言及しなければいけないことが生まれていた。

竜司は視線を逸らしたまま、女子生徒に軽く頭を下げる。

「まあ、助けたのはそんな理由なんだけど……その……悪かったよ」

「はあ……? あんた一体何を——」

女子生徒は軽く眉を蹙め、視線を下げ……。

「へ、あ、つい、いやあああああああああああ!」

そこでようやく自分の姿に気付いたようだった。悲鳴を上げてその場にしゃがみこんでしまう。彼女の制服は、見るも無残にズタズタだった。スカートは少し裾が破けている程度だが、上の部分はもはやぼろ雑巾以下。下のシャツも同様で、薄いピンクの下着と健康的な素肌がすっかり露わになっていた。どうやら先ほどの余波でこうなってしまったらしい。

震える女子生徒を前にして、リリティカがほんの少し剣呑な目で竜司を睨めつける。

「助けてあげたのはえらいんだけどさあ……りゅーくん、まさかわざとこの子の服だけ狙ってやったとかじゃないよねえ……?」

「ちっ、違う!! 手元がちよっと狂っただけだ!!」

竜司は全力で無実を訴えた。実際のところ、女子生徒に被害が及ばないよう、ちゃんと力

加減をしたつもりだった。

心配して確認するが、女子生徒の素肌には傷一つついておらず「安心。だが、羞恥しうちのせいか赤く染まり始める彼女の肌の前では、そんな言い訳は無意味だった。竜司は慌てて自分の上着を脱いで、女子生徒に差し出す。

「わ、悪かったよ。ほら、これでも着てろ」

「……え？」

女子生徒は目の端に涙を溜めて、ぽかんと竜司を見上げる。

その目に竜司はほんの少したじろぎ、顔を背けてぶつきらばうに言う。

「俺みたいなバケモンの着てた服なんぞ嫌かもしんねーけど、そのままにいるよりよっぽどマシだろ。どうせ代わりはいくらでも学園から支給されるんだ。返さなくてもいいからよ」

「え、え、ちよっと、あのっ」

「いいから着てろ！ 風邪かぜでも引かれると俺の寝覚めが悪いんだよ！」

女子生徒に無理やり上着を押し付けて、竜司は周囲に目を向ける。

いつしか力の爆発は収まり、辺りには重々しい空気が立ち込めていた。

巨大な獣が残した爪痕つめあとのような深い轍ぐりが刻まれた地面。あちこちに伏せて転がる襲撃者たち。彼らの口から漏れ出る呻うなき声が、難を逃れた者たちの耳朶みみを打ち、その闘争心を削り取った。

もはや二人を取り囲んでいた生徒の輪は倍の大きさにまで広がっており、次の襲撃が起こる



気配は微塵もない。誰も彼もが周囲の様子に落ち着きなく視線をやり、たったの一步も踏み出そうとはしなかった。

諦観の滲むその空気に、竜司は軽い落胆を覚える。

「おいおいおいおい……まさかもう終わりって言うんじゃないかな？」

竜司は肩を竦め周囲の者たちに呼びかける。

「準備運動にもなんねーぞ。誰でもいいから出てこいって。一瞬で捻り潰してやるからよ」

「ダメだよりゅーくん、そんなこと言っちゃ。みんな弱いなりにがんばってるんだよ。あんまりいじめちゃ可哀想でしょ」

「お前は少ない語彙で煽るのうまいよなあ……尊敬するわ」

「え？ そうかな？ えへへ、みんな聞いてよ！ りゅーくんにはめられちゃった！」

好き勝手に言う竜司とリリティカに、誰ひとりとして何も言わない。

その場のほとんどが、自らの力が通用しない敵の前に、ただ唇を噛み締めるだけだった。

「まあ……所詮はこんなところだろうな」

壇上ですべてを見守っていた化野が、時計を確認してつまらなさそうにため息をつく。

今日の記録は三分二十六秒。集団での討伐としては、まあ持った方の記録である。

化野は声を張り上げ、グラウンドにいる全員に告げる。

「諸君！ 本日の集会はここまでする。明日からはこれまで通り学園の規則に従い、各自彼

らの討伐に励んでくれたまえ！」

それに対して、誰も、何も応えない。

ただ、ごくりと喉を鳴らす音だけがあちこちから聞こえてきた。

漂う緊張感を吹き飛ばすように、竜司がアウスレーゼを高く掲げる。太陽に照らされ、剣身に巻き付く銀の鎖が目も眩むほどの輝きを放ち、その鋭利な白光は死神の鎌を思わせた。

その場の全員の注目を一身に浴びながら、竜司が、リリティカが叫ぶ。

「ようよう雑魚ども！ 今年度も俺たちと仲良く遊ぼうじゃねえか！」

「いつでも相手になってあげるんだからね！ 感謝してくれたっていいんだよ！」

そして二人は宣言する。

異世界を救った経験を持つ奇跡の英雄……《救道者》たちに。

彼らの討つべき宿敵として。

「この世界を救いたいのなら……俺たち《災厄の魔獣》を倒してみせろっつ!!」  
「みせなさーいっ！」

# 一章

## エンブリオ・イーター 《災厄の魔獣》

綾神学園

は、絶海の孤島に建設された中高一貫の学校である。

生徒や職員たちは全員が例外なく島内の寮で、卒業するまで共同生活を行う。

島は東京都ほどの広大な面積を誇り、学園だけではなく、スポーツ公園やカラオケといった娯楽施設から、手つかずの自然の残る山林地区まで様々なものを兼ね備え、ひとつの街のようになっている。

日本政府による実験的な教育計画の一環で作られた学園であり、厳密な調査のもと入学を許可する生徒を決定し、日本中から優秀な人材をかき集めて運営されている。

……と、というのが、表向きの情報だった。

「キエエエエエエエエエ!!」

甲高い気合の声とともに振り下ろされる日本刀。

「死につつさらつせええええええ!!」

燃え盛る炎をまとった音速の鉄拳。

「零れ雪ながれ水霜柱! 詠みて凍えて掻き抱け!」

獲物を捕らえ貫かんと地を走る氷の葛薔薇。

「はいっ」

手近に迫った氷の葛薔薇はリリティカの《禍の紡織衣》によって動きを止めて。

「ザコがいきがつてんじゃねーよ!」

その他襲撃者は、竜司が振るうアウスレーゼによってあつけなく倒されていった。

今日から新学期。新しい学年で、新しい日々が始まる晴れやかな日だ。

かるうじて残る桜の花を眺めながら、竜司とリリティカは寮から綾神学園高等部に続く小道を歩いていた。襲撃者たちを片っ端から、ばったばったとなぎ倒しながら。

「うーん。春休みは短かったけど、なんだかこの登校風景も懐かしいねえ」

「そうだな……つくしゆ」

鼻をすすする竜司は、制服の上着を着ていなかった。春先とはいえ朝はまだ少し肌寒く、シャツ一枚ではさすがに堪えた。昨日の集会が終わってからすぐに学園本部まで制服の替えを申請したが、配給には早くても今日の放課後を待つ必要があるだろう。

「もー。新しいのをもらえるまで、なにか羽織ってくればよかったのに」

「バーカ。学園では指定の制服がジャージしか着用を認めない、って校則にあるだろうが」

「りゅーくんはつくづく真面目バカだよねえ」

「うるせえ。つてか、お前はいつまで朝飯食ってんだよ」  
「え？」

食パンまるごと一斤を抱えて食べ歩いてたリリティカが、不思議そうに小首を傾げる。

「やだなありゅーくん。これは朝ごはんじゃないよ。デザートなの」

「たしかに食パン一斤に含まれる糖質はかなりのもんだ。だがな、それをデザートだと認めてやる心の広さは俺にはない」

「うーん……りゅーくんは難しいことを言うなあ」

「朝から米三合炊いて、鍋いっぱい味の噌汁と二バック分の卵焼きを作られる身にもなるとな、あれで足りねえのかって腹が立つてくるんだよ」

「だってりゅーくんの作るごはんがおいしいすぎるのがいけないんだよ！ おいしすぎて、余計にお腹がへっちゃうんだから！」

「つまりそうなる、もう絶食させるしか手はないのか……」

そんな仲の良いやりとりの最中も、二人は的確に襲撃者を倒していく。

制服を着た生徒や、スーツ姿の教師。はては一見普通のおばちゃんまでもが凄まじい異能の力を揮い、竜司やリリティカを狙う。

「よいしょっ」

「クソ弱えぞザコども！」

が、二人はそれらをすべて防ぎきり、なぎ倒す。

二人が通ってきた道は見ると無残に破壊され尽くされ、その端には点々と気絶した襲撃者が倒れている。綾神学園医療班が倒れた彼らを肅々と回収するその横を、他の生徒たちがそろぬ顔で通り過ぎていく。

綾神学園の、いつも通りの光景だ。

「とーちゃくっ！」

リリティカがびよん、と跳ねて学園の門をくぐる。

竜司もその後が続き、普通に敷地内へと足を踏み入れた。

二人が学園の敷地に入った途端、襲撃は嘘のように無くなった。取り囲んでいた者たちはそれぞれが得物を下ろしたり呪文詠唱を止めるなどして、後は何食わぬ顔で竜司たちと同じように門をくぐって登校していく。

これもまた、いつも通りの光景だった。

「校内戦闘は厳禁って校則があるけどなあ……なんか拍子抜けだよな、この光景は」

「えー。便利じゃないの、わたしたちにとってはさー」

そんな話をしつつ二人はそのまま校内に入り、我が物顔で廊下を歩く。すれ違う生徒たちは二人の姿を見つけるとほんの一瞬だけ体を強張らせ、すぐに視線を外して無視を決め込んだ。

綾神学園は中等部と高等部を併せ持つ、広大な学校である。「コ」の字型の左右対称な校舎

と、その中庭を隔てた向こうにある体育館とプール。それ以外にも雑多な建物を敷地内に併せ持っていて、教育施設としては申し分ない学園だ。

二人が向かうのは校舎の右側……高等部校舎。その一番奥に存在する高等部二年S組の教室だった。

教室の前にたどり着くと、中から何人もの生徒たちのざわめきが聞こえてくる。始業前の学舎としてはありがちな雑音。

それを聞き流しながら竜司はドアを思いっきり開く。

「よーっす、クラスメイトの諸君、竜司様とリリティカ様のおでましだぞー」

「おはようだよ、みんな！二年になってもよろしくね！」

竜司たちが教室に入ると、途端にクラスの生徒たちが口を噤んだ。談笑を弾ませていた数人組も、一人静かに読書していた生徒も、誰も彼もが一樣に竜司とリリティカに刺を含んだ視線を送り、身じろぎすらしなかった。

しばし、教室の時間が凍りついたかのような静寂が落ちる。

「おはよう二人とも」

息の詰まる緊迫感の中、一人の少年が竜司とリリティカに気安く声をかけてくる。

整った顔立ちに人の良さそうな笑みを浮かべた、どこにでもあるような普通の少年だ。体つきはどちらかといえば華奢な方だが、弱々しさを感ぜさせない強さを内に秘めている。

「よう、冬彦」

「おはよう！冬彦くん！」

「あはは、今日も元気そうだね。じゃあ早速……」

冬彦、と呼ばれた少年がばちん、と一つ指を鳴らす。

すると竜司とリリティカを囲むようにして、漆黒のベアトラップが音もなく出現した。

狩猟において獣の足を捕らえるために用いられるはずの器具である。しかし出現したそれは足どころか胴体を切断しかねないほどの巨大さで、夜闇から鑄造したような不気味な色合いもあって処刑具めいた残忍さを滲ませていた。

「死んでくれるかな？」

ベアトラップはバチンつと大きな音を上げ、二人を真つ二つにせんとその刃を閉じ――

「悪いな、この程度じゃあ無理だ」

竜司の伸ばした両手で、左右の刃は難なく食いとめられてしまう。

ベアトラップはそれでもなおギシギシと音を立て、竜司の手のひらに喰らいつく。骨すら断ち切るほどの途轍もない圧力だが、竜司の手の皮をわずかに傷つけることすら叶わなかった。

まるで子猫のじやれる爪のように、竜司はその異形のトラップをあしらひ、それどころか少しずつ押し返していく始末だった。

「さすがりゅーくん。わたしが《禍の紡織衣》を出すほどでもないねー」

「やれやれ……そうだよねえ、この程度じゃあ殺せないか」

冬彦はそんな実りのないせめぎ合いを見てため息をつくのと、また指を鳴らす。  
すると漆黒のトラップは霞のように消え去った。

高等部二年S組学級委員長、冬彦——名字も二つ名も……彼には存在していなかった。

苦笑を浮かべる冬彦に、竜司はわざと挑発するように言う。

「初日から大層なご挨拶だな、冬彦よ。つーか校内では戦闘禁止だろうが」

「あの校則は校内設備の破損を禁じるためのものだろう？ さっきの技は影でできているんだから誰も触れないし、目標物以外を傷つけない。校則に触れずに君たちを攻撃できる、とっても便利な能力なんだよ」

「ふうん。俺は気合入れれば触れたけどな」

「それは君くらしいものだって。あーあ……別に本気じゃなかったけど、やつぱりちょっと悔しいかなあ」

ぶつぶつとやるせなさそうに呟く冬彦だが、最後は諦めたように笑う。

「まあともかく、クラス代表宣戦布告はこれで終わり。今年度もよろしくね、竜司」

「ああ。よろしく」

そうして冬彦が差し出した右手を、竜司は力強く握り返した。

これで一段落、と思いきや見守っていた他のクラスメイトからは、野次のようなものが飛ば





される。

「ちっ……いい加減大人しく殺されとけよ、てめーら！」

「まあた毎日こいつらの顔を拝まなきゃなんねーのかよ」

「あはは！ほんっと、どの面下げて入ってくるんだろねえええ！ぎゃひゃひゃはは！」

「今日も可愛いよ、リリティカちゃん！僕は君を殺めねばならない運命を呪う……！」

「竜司君も結構可愛い顔してると思うけどなあ。殺せたら、私専用の抱き枕にするんだ♪」  
いくつか変なものもあったが、このクラスはこれで平常運転だった。

半年前、この学園が始まった時からクラスの顔ぶれはほとんど変わっていない。

誰も彼もが得体のしれない強者のオーラと、痛いほどの殺気を放っている。

そんなクラスメイトたちを見渡して、竜司とリリティカは不敵な笑みを浮かべてみせる。

「そんじゃまあ、今年も仲良く遊んでくれよな！ザコの諸君！」

「あそんでねっ！弱っちいみんな！」

瞬間、野次が止み、教室に満ちた殺気が膨れ上がる。

壁や天井に細かい亀裂がいくつも走り、空気が言い知れぬ閉塞感を帯び始めた。

クラスの全員が、あらん限りの殺気を込めた眼で竜司とリリティカのことを見つめている。

常人ならば一瞬で失神してしまいそうな威圧感が渦巻く中、冬彦は呆れたように肩を疎めるだけだった。

「まったく、二人ともどうしてそう挑発するような真似をするんだか」

「うるせえ。これが俺たちのやり方だ」

「はは、知ってるよ。ま、適度に頑張ってね」

そう言って、ギスギスした空気をものともせず、冬彦は自分の席に戻ってしまふ。

冬彦は竜司たちの討伐に対するやる気がまったくない、珍しいタイプの生徒である。そのモチベーションの低さゆえ、竜司たちとは適度に談笑し合う仲だった。

（まあでも……敵に回すとわりかし面倒臭そうだけどなあ）

とりあえず、竜司とリリティカも平然と自分たちの席に着く。

前年度から変わらない、窓際一番後ろの特等席だ。

竜司たちが席に着くとほぼ同時、始業のチャイムが鳴り響く。

そして、教室前方のドアがガラッと開かれ。

「ふむ、朝から元気のいいことだ」

昨日全校生徒の前で演説を行った、化野早苗が顔を出した。

化野は殺気立つ教室の中を見回すと数度手を叩いて呼びかける。

「さあ、みんな席に着きたまえ。殺気も抑えて。今日はH Rの前に転入生を紹介するぞ」  
すると、その言葉にクラスの生徒たちは虚を突かれたような顔をする。

「転入生……？ A組を飛ばしていきなりここ？」

「きひひ……骨のあるやつなのかナア」

竜司たちへの殺意も忘れてそんな会話を交わしながら、ざわつきつつも席に着いた。かく言う竜司とリリティカも不可思議そうに顔を見合わせた。このクラスはS組。並はずれた実力者が集められたクラスである。どんな実力者であったとしても、スタート地点はA組からと決められている。それをすつ飛ばしていきなりS組とは……。

「へー、一体どんな奴が——」

『《災厄の魔獣》!?』

悲鳴のような声で、誰かが自分たちの二つ名を叫んだ。

竜司が驚き顔を上げると、教卓の前に立っていたのは昨日助けた女子生徒だった。

ぼろぼろになったはずの制服は新品になっていて、真新しい学生靴を提げている。

女子生徒は信じられないものを見る目で竜司とリリティカを見つめていた。見知った顔に竜司は「へえ」と感嘆の声を漏らす。

「なんだ、昨日のドジっ子か」

「どっ、ど、どじっこおおお!!」

おっと心の声が漏れてしまった。

慌てて口を噤む竜司だが、女子生徒は目を吊り上げて名乗りを上げる。

「私には飴宮琴良っていう名前があるのよ! 変なあだ名つけないでくれる!?」

「わかったわかった。悪かったな、琴良」

「りゅーくんがごめんね、琴良ちゃん」

「待ちなさい! なんていきなりフレンドリーなのよ!」

「フレンドリーってか、俺の『野々柳』って名字が微妙に呼びにくいせいか、知らない奴にも下の名前前で呼び捨てされることが多いんだよ。だから俺も初対面の相手は全力で下の名前を馴れ馴れしく呼び捨てすることにしてるんだ。よろしくな、琴良」

「わたしは下々のものとわけ隔てなく触れあうことで、心の豊かさを見せつける作戦だよ?」

「知らないわよ! そんなこと!!」

琴良と竜司たちのやりとりに、クラスメイトたちがざわつき始める。

そこに化野がごほんと咳払いして口を挟んだ。

「落ちついたまえ、飴宮君。彼らは——」

「なんで《災厄の魔獣》が教室にいるんですか!? っていうか、どうして周りの人たちもこいつらと仲良く座ってるんですか!? おかしいじゃないですか、だって……!!」

化野に真っ向から噛みつき、琴良はビシッと竜司たちを指さし叫ぶ。

「あいつらは世界の敵なんでしょう!」

「君の言う通りなのだがね。ともかくまあ、説明をするから落ちついたまえ、飴宮君」

「ぐっ……うう……」

化野に言われ、琴良は肩をぶるぶると震わせながらもぐつと口を嚙む。

しかしその間も竜司たちをキッと睨みつけ続けていた。敵意と殺気と、あらゆるどす黒い感情がミックスされた痛い視線だ。竜司が爽やかな笑顔を浮かべてぐつと親指を立ててみせると、琴良の頬が思いっきり引きつった。狙い通りの反応だった。

その光景に化野はため息をつき、仕切り直しとばかりに琴良に微笑みかける。

「さて、館宮君。改めて自己紹介しよう。私の名は化野早苗。この学園の教師であり、このクラスの担任だ。転入したてでこの学園のことなど、分からないことだらけだろう。少しばかり講釈を行っても構わないだろうか？」

「……お願いします」

むすつとした顔で答える琴良に、化野は満足げに頷いた。そうして教室中を見渡し言う。

「二年S組の諸君らにとっては分かりきった話だと思うが、ここは新たな同士のためにどうか傾聴してくれたまえ。そして、竜司にリリテカよ……貴様らも今のような余計な茶々を入れぬようにな」

「はい」

ジロリと睨めつける化野に、竜司たちは声を揃えて返事をする。事の渦中にいるのが自分たちであるとはいえず、ここで話を拗らせていいことは一つもない。化野やその他生徒たちを挑発するのなら、先ほど教室に入ってきた時の一悶着のようにもつといい場面がいくつもある。

そんなわけで口を嚙んだ竜司たちを見て、化野はあからさまな敵意を剥き出しに鼻を鳴らした。しかしすぐに意識を切り替えてか顎に手を当て思案を始める。

「では何から話そうか……そうだな、まずは大前提からいこう」

化野はおもむろに右手人差し指を虚空に翳す。時を置かずしてその指には鮮やかな紅蓮の炎が宿り、やがてその炎は大きく燃え盛り、燐光をまき散らしながら化野を取り巻く渦と化する。紛うことなき異能である。だが、琴良はおろかクラスの誰もが驚愕の声を上げることがなかった。この場の全員にとって、その程度のことは当然の光景だった。

化野はニヤリと笑みを浮かべ、決定的な言葉を告げる。

「この島にいるのは皆、異世界を救ったことのある英雄——《救道者》である」

《救道者》。

何らかの事情によって異世界に迷い込み、異能の力を得て、その世界を救ったもの。

綾神学園を有するこの島は、そうした特殊な事情を持った超人たちを集める場所だ。

化野の言葉に、琴良はおずおずと頷いてみせる。

「それは事前に聞いていましたが……本当なんですか？」

「もちろんだとも。この場の生徒諸君だけでなく、教員以外にも、公務員や食堂の調理士、学園併設研究施設や医療施設の職員など……とにかく、この島にいるのは《救道者》だけだ。日本中からかき集め、今のところはざっと二千人ほど、といったところだろうか。君も昨

日の集会で見ただろう」

「めちやくちやな話ですね……」

地獄の業火<sup>ごうか</sup>を呼び出す魔女。

数多<sup>かずた</sup>の聖なる剣を操る劍士。

雷<sup>いかずち</sup>の大槍<sup>しょうかん</sup>を召喚する少女。

そんな梓外<sup>わくがい</sup>の人間たちがのべ二千人。この島に集結しているというのだ。

ほやく琴良に化野は薄ら<sup>うす</sup>と微笑みを浮かべてみせる。

「君の言う通り、めちやくちやな話だ。滑稽<sup>こっけい</sup>ですらある。だが……」

化野は琴良の目をひたと見据え。

「こうでもしなければ、我ら人類に未来はないのだよ」

「……」

さらりと重い言葉突きつけられ、琴良は言葉を詰まらせる。

他の生徒たちも様々な反応を示した。ため息をつく者、目配せし合って頷く者、肩を竦める者。それぞれの仕草<sup>しぐさ</sup>が、化野の言葉を事実であると認めていた。

この学園は、単に《救道者<sup>サプレス</sup>》を集めるためにできたわけではない。己<sup>おのれ</sup>の技術をより高めるだとか、《救道者<sup>サプレス</sup>》たちの頂点を決定するだとか、そんな平和な理由でも決してなかった。

琴良はちらりと竜司たちに視線をやる。敵意にまみれていた先ほどとは異なり、その瞳<sup>ひとみ</sup>は



不安でかすかに揺れていた。

肩を竦める竜司とリリティカを指差し、琴良は言う。

「あの二人……《災厄の魔獣》を殺すために、私たち《救道者》は集められた」

「そうだと。ま、それだけが目的ではないのだがね」

琴良の独り言のようなつぶやきに、化野は平然と頷く。

「ともかく、あの憎き魔獣を討つ最大の好機なのだ。多少の無茶は止むを得まい。君もそう思うだろうか？」

「はあ……実は私、その魔獣についてよく知らなくて……」

「そうか。君は魔獣が暴れ始めた頃から最近まで、この世界にいなかったんだったな」

「ええ、ずっと異世界にいて……帰ってきたのは、ちょうど一か月くらい前ですかね」

歯切れ悪くそう言うってから琴良は眉を寄せ、不満げな顔を作る。

「ようやく家に帰ったと思ったら、堅苦しいスーツの人がやってきて……気付いたら転入手続きを進められて、この学園に連れてこられたんです。ほんとど説明もなく」

「手際の乱暴さについては謝罪しよう。だがまあ、我らもそれだけ《災厄の魔獣》に手を焼いているということさ」

化野が今度は右手で虚空を撫でる。

すると彼女の体を取り巻いていた炎が中空に広がり、灰白い幕と化した。

「《災厄の魔獣》とは、一年前、突如として東京に出現した最凶最厭の化けモノだ」

化野の言葉に応じ、炎の幕に映像が映し出された。

「東京、香港、ワシントン……三か月という短い期間の中で、数ある都市を無差別に襲撃し、この世界に壊滅的な被害を与えた。これはその、ほんの一例だ」

瓦礫の山から覗く人の手。

幾筋もの黒煙が立ち上る焦土。

ひどい怪我を負い血まみれで運ばれる人々。

そうかと思えば物々しい武装を行った軍隊が、崩壊した街中を必死の形相で進む画像が映し出された。しかし画面を何か巨大な黒い塊が横切った刹那の後は、それらの兵士たちは血溜まりの中に沈んでしまっていた。戦車もまるで玩具のようにひしゃげている。

血風と砂煙が混ざり合う不鮮明な映像。だからこそ映し出されるその悲劇が、一層際立って演出されていた。

琴良は映し出されるその光景に見入り、忌々しげに唇を噛み締める。黙って見ていた生徒の中にも、耐えかねたように目を伏せる者がいた。

そして竜司たちはといえど。

「……………懐かしいなあ」

「そうだねえ」

まるで他人事であるかのように、小声で言葉を交わし合うだけだった。  
重々しい空気が流れる中、化野は右手を振って炎を消すと朗々と続きを語る。

「当時、最強クラスの《救道者》たちが全力を賭して《災厄の魔獣》に立ち向かったが、まるで歯が立たなかった。魔獣どころか、その手下ども——《災厄の牙》にすら太刀打ちできず、人類は世界が終わりゆく様を、ただ指をくわえて見ていることしかできなかった。だが……」  
そこで化野は言葉を切り、自嘲気味な笑みを浮かべる。

「魔獣が現れて三か月が経ったある日のことだ。突然、状況は一変する。その日東京で暴れていた魔獣が、何の前触れもなく謎の光に包まれ、姿を消した」

「……………は？」

化野の言葉に、琴良が目点を点にする。しかし化野は気にかけることなく。

「そして、魔獣が消えた場所から二人の人間が見つかった」

化野は竜司とリリティカを顎で示し。

「《災厄の魔獣》と同じ魂、同じDNA、同じ気配を持つあいづらが……な」

教科書でも読み上げるような平坦な口調で、そう言っただけだ。

「それ……本当の話なんですか？」

疑いの眼差しを向ける琴良に、化野は苦笑を浮かべてみせる。

「恥を忍んで言うが、魔獣討伐に当たるも成果を出せなかった《救道者》……その一人が私

でね。私を含む計七名で此奴らを捕らえ、綿密な調査を行った。その結果が黒だった、というわけだ」

化野は肩を竦めて竜司とリリティカを見やり、小さくため息をつく。

「私だって信じられなかったさ。だが元々魔獣自体めちゃくちゃな存在だったんだ。ある時は竜だったりある時は虎だったりと姿を変えるわ、そこに在るだけで空間に影響を及ぼすわ」

「空間に影響？ どういうことですか？」

「《救道者》なんて夢物語の存在は、世界で一人か二人、出るかどうかの確率だ。だが、日本だけは異常な数の《救道者》を輩出している。これは最初に魔獣が現れたせいで、日本全域の空間が揺らぎ、時間軸を無視して異世界と繋がりがやすくなっているからと考えられているんだ」

「まさか、私たちがみたい十代の《救道者》が多いのも……？」

教室を見回しおすおすと言う琴良に、化野は「そうだとおも」と首肯する。

「魔獣発生時に近ければ近いほど、異世界に招かれる率が上がるらしい。だからここは学校という建前で作られているんだ。まあ、多数派に合わせたわけだな」

「もう、何がなんだか……でもそんなバケモノが、どうして今はこんな姿に？」

「『こんな』とはなんだ、『こんな』とは」

琴良の言葉に竜司がムツとする。

しかしすぐに気楽そうな笑みを浮かべ、胸を張って言うのだ。

「色々あって魂が二つに分かれちゃったから、その辺に転がってた死体二つに潜り込んで力が回復するのを待つことにしたんだよ。なあ、リリティカ」

「うん。ちよーど、こんなイケメンと美少女がいて、超ラッキーだったよねえ」

「そ、そう……よかったわね」

琴良は二人の気楽なテンションに戸惑い眉を顰めるが、化野は気にすることなく語る。

「そんなわけで、捕獲したこいつらを封じ込める檻かつ処刑する場所として綾神学園が始動した。今から半年前のことだ。こいつらが出てからは手下の《災厄の牙》エンリオーファングどもも姿を消し、私たち《救道者》サブレズたちは心おきなく、この二人を葬り去ることに専念できているというわけだ。……未だに成果は芳しくないがな」

自虐気味に言い放ち、化野は口の端を持ち上げぎこちない笑みを浮かべてみせた。そうして琴良に向き直ると毅然と背筋を正す。

「館宮君。この学園の目的は、大きく分けて三つある。一つ目は、この地球にくぐまれに現れる異世界からの侵略者を討伐すること。二つ目は行方知れずの《災厄の牙》エンリオーファングを探し出し討伐することだ。まあ、これらは《救道者》サブレズの中から有志たちが主に任務に当たってくれている。だから、君がまず考えるべきことは三つ目の《災厄の魔獣》エンリオーイーター討伐。これだけだ」

「はあ……………」

琴良は気乗りしないような生返事をするだけだった。

しかし化野はそれに不快な顔をするでもなく、淡々と次の言葉を紡ぎ出す。

「だから、卒業するその日までよろしく頼む」

「……………はい」

化野が続けた言葉に、琴良は重々しく頷いた。黙して耳を傾けていた他の生徒たちも、同じように息を呑む。

卒業。この普遍的な言葉が、この学園では、《救道者》サブレズにとつてはとても重い。

真剣な顔をしていた琴良だが、ふと何かに思い当たったように眉を顰める。

「……で、今の説明を踏まえた上で、どうしてその《災厄の魔獣》エンリオーイーターが学校に通っているんですか？」

「なに、簡単な話だ」

化野は眼鏡を持ち上げ、平然と言う。

「ここが日本領土である以上、教育を受ける義務はあいづらにも存在するだろう」

「あいづらは日本人じゃなくて、世界に仇なす敵なんですよ!」

琴良のツツコミに、生徒たちの大半が真面目な顔でうんうんと頷いた。

化野は肩を竦めるだけだった。

「まあ、義務云々は建前で、本当は日常の中で殺す機会を窺ってもらおう、という学園理事

長の意図だ。あいつらがヘタに引き篋<sup>こ</sup>もれば、我らに殺すチャンスなど皆無<sup>かいむ</sup>だろうからな。衣食住の保証をするかわりに、就学などなどの義務を課している」

「茶番<sup>ちやばん</sup>にもほどがあると思うんですけど……!!」

琴良の悲鳴のような声に、生徒たちだけでなく竜司とリリティカも納得の面持ち<sup>おももち</sup>で頷いた。

たしかにおかしな話だと思う。《救道者<sup>サブレス</sup>》たちの学舎に通う世界の敵。

だが竜司たちは化野に言われた通りに茶々を入れることなく、しれっとした態度でその話を聞いていた。

「まあ、堅苦しい説明はこの辺でいいだろう。そろそろ飴宮君の紹介といこうじゃないか」

「はあ……」

化野の言葉に、琴良は洪々<sup>しほふ</sup>といった様子で頷いた。納得できなさそうな顔である。

しかし化野は満足げに微笑み、緩<sup>ゆる</sup>んだ空気を跳ね飛ばすかのように手を叩いた。教卓の前に立って注目したクラスの生徒たちを一人一人見回してから、琴良を示して語りかける。

「さて、先ほど諸君らが驚いたのも無理はない。S組への一発編入など、これまで前例のないことだ。だが彼女はそれに見合うだけの実力を有しているがゆえ、今回だけ特例が認められた。何しろ彼女は七つの——」

「ツツ、先生！」

その声を遮<sup>さへぎ</sup>って、琴良が突然大声を上げる。ざわり、と教室中が揺れる中、琴良はほんの

少しだけ目を吊り上げ、不服そうな面持ちを浮かべて言う。

「私が……自分で自己紹介します」

「ほう、そうかね。ではどうぞ」

さっと化野が脇に退き、教卓の前には琴良だけが残される。生徒たちが首を傾げて見守る中、琴良は深呼吸してから教室の中を見回した。

そして言う。決定的な言葉を。

「名前は飴宮琴良。救った世界の数は……六つよ」

『なっ!!』

その言葉にクラスメイトたちは全員が揃<sup>そろ</sup>って絶句する。

彼らは異世界と呼ばれ、異能を得て、その異世界を救った。だからこそ知っている。

一つの世界を救うことが、一体どれだけ血のにじむ努力を必要とすることなのかを。複数の世界を救った《救道者<sup>サブレス</sup>》の前例はいくつかあり、この学園の生徒の中にも幾人<sup>いくにん</sup>が存在している。しかし、その中でも琴良の告げたその数字はあまりに異質なものであった。

「なんつー……」

「すごい……ねえ」

竜司とリリティカも複雑そうな面持ちでそっと目配せし合い。



「ふむ……」

そして化野は琴良のことを、少しだけ不思議そうな目で見つめていた。

緊迫感の満ちる中、琴良は続ける。決意のようなものが込められた、強い口調で。

「ぶっちゃけて言うと、私はこの《災厄の魔獣》<sup>エニシイ・イモク</sup>退治自体に興味はないの。それが力を持った者の使命だって理解しているから、拒否するわけじゃないけど……でも、本当の目的はまったく違う」

言葉を切ってしばし沈黙し、やがてきつぱりと言い放つ。

「私は……炎を纏った剣を持つ、とある《救道者》<sup>サブレス</sup>を探しているの。それがここに来た最大の目的よ！」

## 二章

# 館宮琴良という《救道者》<sup>サブレス</sup>

<sup>ことら</sup>琴良の自己紹介が終わってからはH Rとなり、昼前には解散となった。

<sup>ゆる</sup>緩やかな空気が流れる中。待つてましたとばかりに竜司<sup>リョウジ</sup>とリリティカは琴良の机に集って話しかける。

「なあなあ。琴良って本当に六つの異世界を救ったのか？」

「がんばったんだねえ。もしかして学園での公式最高記録じゃない？」

「記録なんてどうでもいいわ」

帰り支度<sup>したく</sup>を淡々とこなしつつそっけなく答え、琴良はじろりと二人を睨みつける。

しかし竜司は変わらぬ調子で軽く話しかける。

「ま、そんじゃその冒険譚<sup>ぼうけんたん</sup>について詳しく聞かせてくれよ」

「はあ……？」

「いや、なんか俺<sup>おれ</sup>、お前に会ったことある気がするんだよね。昨日の集会の時じゃなくて、もっと前にさ」

「何よその陳腐なナンバ台詞<sup>ちんぷ ぜりふ</sup>」

琴良は思いっきり眉を顰め、あからさまに不快そうな顔をする。

「変なことを言うのはよしてくれるかしら。あんたに会ったのはこの島にきて昨日が初めてよ」「いやマジで。だからそういう縁も含めてさ、頼むこのとおり!」

手を合わせて頭を下げる竜司に、琴良は眉を顰める。

そしてついつと顔を背けて言うのである。

「何と言われようと、嫌に決まってるでしょ。どうして敵であるあんたたちなんか……」

そこで琴良はハッとしたように竜司たちに視線をやり、忌々しげに言う。

「さては敵情視察……ってところかしら」

「明察」

琴良の言葉に、竜司は顔を上げてニヤリと笑ってみせる。

そうして腕を広げて語り上げるようにして言うのである。

「六つの世界を救った《救道者》様ときちや、俺たち《災厄の魔獣》の邪魔になることは間違いないからな。早めに対策を考えた方がいいかと思っただけよ」

「だからって私本人に直接聞く?」

ほんの少し眉根にしわを寄せてはやいてから、琴良は真摯な顔で竜司に向き直る。

「まあいいわ、私も丁度あんたたちに聞きたいことがあったの。それに答えてくれるなら、一つだけ質問を許そうじゃないの。どうぞ?」

「はいはいはい!」

リリティカが元氣よく挙手する。

「琴良ちゃんって、どんな能力を持つてるの?」

直球の質問に琴良は真面目な顔のまま。

「剣よ」

たった一言短くそう答えるのだ。

シンプルイズベストといったその回答に、リリティカは唇を尖らせる。

「剣だけじゃあ分らないよ。炎を出したり、雷を撃つたりとか、そんな派手な技はないの?」

「そんな技があったとしても教えないし、質問は一つまでって言ったでしょ」

「ぶー。ケチい」

「なんとでもおっしゃい」

むくれるリリティカの恨み言を、琴良は平然と流すのだった。

剣技だけ、とは《救道者》まみれのこの島では何とも地味な能力である。しかし。

「単純に剣だけで強いとか……これは厄介な相手になりそうだねえ」

「まったくだ……」

実のところ竜司とリリティカにとっては、一番厄介な能力でもあった。

目配せし合う竜司たち。琴良はそれを気にかけるそぶりも見せず、小さくため息をついて言う。

「それじゃ今度は私の番ね」

「しかたないなあ。じゃあ、どうぞ」

リリティカが発言を促すと、琴良は何度か深呼吸して息を整え、まっすぐ竜司たちを見つめて尋ねる。

「あんなたち、炎の剣を持った《救道者》に心当たりはない？」

「……」

それに、竜司とリリティカは同時に疑問の声を上げ、顔を見合わせるのだった。

炎を纏った剣を持った《救道者》というのは、先ほど琴良が自己紹介の時に話していたものだろう。それは分かるのだが、てっきり自分たちについて質問が飛ばされるとばかり思っていたので、少々驚いてしまう。

目を点にする竜司たちに苛立つてか、琴良が声に棘を含んで言う。

「何よその反応は。文句でもあるって言うの？」

「いや別に……えーっと、炎の剣士かあ」

竜司は腕を組んで考え込み、やがてぼつりと告げる。

「心当たりがないわけじゃないけど——」

「なんですって!？」

そんな曖昧な返答に、琴良は一瞬で食いついた。

竜司の襟首をひつつかみ、ぐぐつと目をつり上げた鬼気迫る顔を近づけてくる。

「お、おとなしく教えないさい！ 喋らないつもりなら、こつちにも考えがあるわよ……!!」

「いや別にすんなり答えてやるつもりだけど。探してるのは具体的に、どんな奴なんだ？」

「どんなって……」

竜司の問いかけに、琴良は途端に口ごもる。

そして顔をしかめて目を逸らし、絞り出すようにして言う。

「顔は分からないのよ。日本出身の《救道者》で、そんなに体は大きくなくて。剣は……」  
そこで琴良はちらりと竜司の顔を見やり。

「あんなのバカでかくて不気味な剣とは似ても似つかない、普通サイズの綺麗な銀色の剣よ。それに炎を纏わせて戦う、とびつきり強い人。これくらいしか分からないのよ」

「漠然としてるなあ。なあ、リリティカ。炎の剣士、ここに何人いたか覚えてるか？」

「そうだねえ」

竜司の問いかけにリリティカは首を傾げ、ややあつてあつけらかんと。

「たしか、三人じゃなかったかなあ」

「三人！」

事もなげに言うリリティカの言葉に、琴良が顔をぱつと輝かせる。

「それくらいなら余裕で調べられるわ！」

たしかにこの広い島の中とはいえ、目星のついた三人程度なら調べ上げるのは容易だろう。だがしかし、そう簡単にいかないことを竜司は知っていた。

お節介だと理解しつつも、やんわりと琴良に忠告する。

「いやあ、無理だと思っぜ？」

「どうしてよ」

「だってお前。三人って、このクラスだけでも、三人いるってことだからな？」

「……………は？」

途端、琴良の顔色はすっと蒼白になるのだった。構うことなく竜司は続ける。

「炎の剣なんてオーソドックスな能力を持った奴なんか、この島に「ごまんといるからなあ」

「あ、やっぱりこのクラスだと四人かも。たしか早苗ちゃん、剣も使えたはずだから」

「まあ、実際はもっといるんだろうけどな。切り札として隠されてるとわかんねーし」

ひどくあっさりとした二人のやりとりに、琴良は呆然と言葉を失くしたままだった。

ひとクラス中に四人。もしくはそれ以上。

そうなると二千人中には一体どれだけの該当者がいるのか。

簡単な算数の問題すら拒絶するかのように、瞬く間に琴良はどんよりと沈んでしまう。

竜司はその肩を叩き、明るく励ましてやるのだが。

「ま、気にすんなよ。総当たりで強い奴を探していけばそのうち見つかるって」

「っ……………うるさい！ あんたなんかに言われなくてもそうするつもりよ!!」

「あーはいはい。そうっすっか」

噛みつくように言われて、竜司は肩を竦めて返すだけだった。

まだまだ聞き足りない部分もあるが、どうせ毎日のように教室で顔を突き合わせることになるのだ。これからいくらかでもその辺は探ることができさるだろう。

教室の真上にかかった時計を見上げると、その針は正午を少し回っていた。

竜司はリリティカに目配せし、いそいそと帰る支度を始める。

「そんじゃ、俺たちはこれから昼飯に行くとするか」

「うん！ ごはんだごはんだ！」

目を輝かせ、リリティカもそれに倣って鞆を片付ける。

その様子を見て、琴良が眉を顰めて尋ねてくる。

「お昼ご飯って……あんたたちもまさか食堂で生徒たちに混じって食べたりの？ それはなんだかぞっとしない光景ね……」

「ううん、晴れの日は大体外外の特等席で食べるんだよ。いいでしょう？」

「別に」

リリティカにそっけなく返す琴良だった。

おかげで竜司は苦笑する。たしかに、それほどいい条件でもない。

「ま、特等席は特等席だが、自慢するほどのもんじゃねえわな」  
「でもでも、りゅーくん。あそこ、景色はいいでしょ？」

「景色が良くてまあ」

竜司は気力なくぼやく。

「殺されかけてると、ゆっくり飯も食えねえだろ」

「……は？」

それに、琴良が目点を点にするのだった。

殺される。どう考えても昼時に聞く単語ではないだろう。

だが、事実なのだから仕方がない。

「あんたたち……ご飯に行くんじゃないの？」

「飯に行くぜ？ ただその飯時に、俺たちは屋外の広い場所で待機してなきゃなんねーの」

「そこでご飯を食べるわたしたちを襲撃するのが、みんなの日常なんだよ」

昼食時、竜司たちは学園校舎の外に出て、《救道者》<sup>サブレス</sup>たちを待ち構えねばならない。

学園校舎内での戦闘は厳禁だが、外で暴れる分にはほぼ制限がないのである。

そのために、『災厄の魔獣』は昼食時や放課後は屋外で待機すべし』という校則があるくらいだ。まあ、それを守っている内は衣食住がある程度保障される約束なので、竜司たちにもメリットがないわけではないのだが。

そんな説明をおおまかにしてやると、琴良は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「ほんと、茶番ばかりね……うん？」

そして何故か深刻な表情で押し黙り、ぼつりと尋ねてくるのだ。

「今から強い奴が寄ってたかって……あんたたちを殺しにやってくるの？」

「だからそう言ってるんだろ」

「………わかったわ」

琴良はそう言って、素早く自分の荷物を片付ける。

そして、とびつきの笑顔を竜司たちに向けてきた。

予期しないその行動に竜司が眉を顰めた瞬間。

「特別に……私もそのお昼ごはんに付き合っただけあげるわ！」

「……は？」

「……え？」

琴良はそんな宣告を放つのだった。

それから二十分ほどして竜司とリリティカ、そして琴良の三人は小高い丘にやってきていた。綾神学園の校舎の裏手にある場所だ。あたり一面短い芝生が広がっていて、少し行けば芝生は途切れて砂浜となり、青く澄んだ大海原が見渡せる。波の音と海鳥の鳴き声が聞こえてきて、

かすかな風も吹いている。

昼食を取ったり、散歩したりするには最高のロケーションだ。

だが、眺める限り、人影は他にひとつも見えなかった。

「こんなに最高の場所なのに……どうして誰もいないのかしら」

竜司たちから少し離れた芝生に腰を下ろした琴良が、そんな疑問をばやいた。

竜司とリリテカは顔を見合わせ、なんでもないことのように答える。

「そりゃまあ。ここは俺たちの特等席みたいになってるからな」

「挑戦する人たちがやってこないの。静かでいいよねえ」

「つまりプライベートビーチってことじゃない。《災厄の魔獣》のくせに……」

「いいじゃねえか、資源の有効活用ってやつだ。ってかお前なんていつてきたんだよ。さっきの話聞いてたろ。これから強い奴らが——」

「ふふん」

竜司の諫めるような言葉を遮り、琴良は鼻を鳴らす。

「言っただしょ、私の探してる炎の剣士もとんでもなく強い人なの。もしかしたら、あんたたちを倒すためにやってくるかもしれないでしょ。それを待ち伏せするのよ」

「ええー……」

それにリリテカが不満げに口を尖らせる。

「つまり、わたしたちをエサにするってこと？」

「そういうこと。だから馴れ合うつもりはないわ」

そっけなく言い放つと、琴良は竜司たちに背を向けてサンドイッチに齧りつく。

ここにくる途中にあった売店で、琴良が入手したものだ。

売店、とはいっても、この島では食堂を利用したり、店で買い物をするのに現金を必要としない。誰もが《災厄の魔獣》の討伐という使命のために集められているので、衣食住の保証はもちろんのこと、学費も免除で、あけくの果てに月々の給料までもが発生する。

「まったく大盤振る舞いでありがたい待遇だわ。《災厄の魔獣》の模様ね」

当てつけのように言う琴良の顔は、少しだけ浮かないものだった。

琴良がバクついているのは、ハムと卵のオーソドックスなサンドイッチ。

それとパックのコーヒーストック。

以上が今日の琴良の昼食だった。売店には他にも色々置いてあったらしいが、琴良が覗いたときには生徒たちによってすでに根こそぎ持つて行かれた後で、ろくなものが残っていなかった。

「味気ねえ食事だなあ。育ち盛りにそれだけで足りるのか？」

「うるっさいわね！ 放っておきなさいよ！」

竜司のツツコミに、睨を吊り上げて睨み返す琴良だった。わりと凶星だったらしい。

しかしそう言われてしまえば放っておく以外に道はない。竜司とリリティカは小高い丘の一番上、ベストな場所にレジャーシートを広げて、自分たちも昼食を取ることにする。

竜司がシートの上に並べた本日のメニューを見て、リリティカが目を輝かせて歓声を上げる。「わあい！ 今日わたし好みの好きなおかずばかりだ！」

「お前に嫌いな食いものなんてねーだろうが。ほら箸、あとこれ取り皿な」

「ありがと！ それじゃ、さっそく……いっただっきまーっす！」

言うが早いのか、リリティカが化けモノじみたスピードで箸を巧みに操って、おかずを駆逐していく。それを、竜司は水筒の茶を飲みながらまったりと見守る。

まるで運動会にはしゃぐ子供と、それを微笑ましく見つめる母親の図だった。

（……深く考えないようにしよう）

自分の在り方に疑問を持つ竜司だが、すべては今更である。

半年前からずっと変わらない日常風景に、竜司は心安らいでいたのだが――。

「なんだよ、琴良」

「い、いや、その……」

琴良が信じられないものでも見るような目で、竜司とリリティカのことを見つめていた。

視線を泳がせながら、琴良はおずおずと尋ねてくる。

「あんたたちそれ……なんなの？」

「弁当だけど？」

「二人分のお弁当の量じゃないでしょ……」

「ふいふもふおうあお？」

口いっばいに食べ物をつめこみ、もごもごと答えるリリティカだった。

竜司とリリティカが囲んでいるのは、特大の重箱三段分だ。

三角おにぎりに、いなりずし。からあげ、海老フライ、肉団子、春巻きに昆布巻きなどなど。それらに加えてプロッコリーやミニトマトが色彩を考えて配置され、脇には別のパックに入った母とオレンジ。栄養バランスを考え、さらに満足感をこれでもかと追求した充実ぶりだった。

「でもそんな荷物、ずっと持ってたわよね。どうしたのよ」

「ああ、荷物になるから朝一番でここに置いてきてたんだよ」

「わたしたちのごはんだってみんな分かつてるから、誰もイタズラしないんだよ！」

「琴良も食うか？」

「おいしいよ？」

「結構よ。敵から施しは受けない主義なの」

竜司たちからの申し出を、またさらりと流す琴良だった。

言い分はクールだ。だが残念なことに……。

「そう言いつつ、お前さっきから重箱にくぎ付けだよな？」

「ちつ、違うわ! 《災厄の魔獣》のくせしていい物食べてて腹が立つのよ!」

琴良は今度こそそつばを向いて、コーヒー牛乳をすすり始める。

その背中には、妙な哀愁が漂っていた。

素直じゃないなあ、と苦笑する竜司の隣で、リリティカがからあげを摘んで一口齧り、ぽつりと言う。

「りゅーくんの作ったごはんは最高なのになあ」

「ぶっ!」

琴良がコーヒー牛乳を思いっきり嘔き出した。

げほげほと咽るその背中に、竜司は眉を顰めてみせる。

「なんだよ急に」

「あ、あんたそれ……全部自分で作ったの!」

「そうだけど?」

竜司の返答に、ドン引きの目をする琴良だった。それにリリティカが胸を張って自慢げに言い放つ。

「自慢の主夫だよ!」

「誰が主夫だ誰が」

竜司は肩を竦めながら、「仕方ないだろ」とぼやく。

「他人に作ってもらった飯なんかどうせ毒まみれなんだ。効きはしないがいい気もしない。だからなるべく自炊してんだ」

「はあ……ほんっとたくましい奴らね」

「ま、食料なんかは困らねえし、掃除に洗濯だつて共同でやつてる。問題ないさ」

「世界の敵がこんな所帯じみた奴だなんて……うん? 洗濯……?」

琴良は急に口を噤む。

そうして何かを思い出すように、眉の間にしわを寄せたかと思えば。

「~~~~~ッッ!」

突然弾かれたように飛び上がると、ごそごと自分の鞆を漁り始めた。

その急な反応に竜司とリリティカが首を傾げて見守る中、琴良は平たい包みを取り出して、それを竜司に突きつける。何故か恥ずかしそうに頬を染め、口をへの字に曲げている。

わけの分からない竜司は肩を竦めて琴良に問いかける。

「あ? なんだこれ」

「なにつて……あんたの上着よ」

「……え?」

「色々あって、すっかり忘れていたわ。昨日貸してくれたでしょ」

「……………えっ!」



竜司だけでなく、リリティカまでもが口を開いたまま、信じられないものを見る目で固まっています。

そんな二人の反応に琴良は一瞬だけ言葉に詰まり、しどろもどろに弁明を始める。

「な、なによ、その目は！　ちゃんと洗濯して、アイロンだっかけてたわ。文句あるの!？」

「いやその……ないどころか……うん」

気圧されるように、竜司は包みの中身を確認する。

そこには確かに制服の上着が入っていた。

色は黒。学園の中でこの色を着ているのは竜司だけである。何しろこの色は、一般の生徒と《災厄の魔獣》<sup>エンフリオ・イクター</sup>を区別するべく詭えられた特別製のものだ。リリティカも元は黒い制服が別に用意されていたのだが、『かわいくない!』と突っぱねて勝手に普通の女子用制服を着ている次第である。特にこだわりのない竜司だけが、黒い制服を着用していた。

それはともかくとして。

「でも昨日……返さなくていいって言ったよな?」

おずおずと竜司が言うと、琴良はほんの少しだけきょとんと目を白黒させる。

「そういえば言ってたような気もするわね。でも、借りたものは返す。当然のことでしょ?」

「お、おう」

琴良の平然と語る正論が、竜司の頭をガツンと殴りつけた。



その横から、声<sup>こゑ</sup>を潜めてリリティカが告げてくる。

（火薬とか、毒の臭い、変な魔術<sup>まじつ</sup>の類、その他もろもろ……一切怪しいところがないよ……）  
琴良ちゃん、ほんとにただ返してくれただけみたい）

（ええええ……マジか）

アイロンをかけたという琴良の言葉通り、目立ったしわも見当たらない。おずおずと袖<sup>そで</sup>を通してみると、普通に着心地がよかった。

怪訝な顔をする竜司とリリティカを前に、琴良はムツとしたような顔をする。

「なによ、これだけじゃ札にならないとでも言いたいのか？」

「いやそうじゃなくって……俺、《災厄<sup>エンリョウ・イーター</sup>の魔獣》で、お前の敵なだけど……どうしてこまでするんだ？」

「たしかにあんたたちは敵かもしれない。でも、昨日のあんたが私を助けてくれたのは事実でしょ？ 私ね、借りは絶対に返すようにしているの。その相手が《救道者<sup>サブレス</sup>》だろうが《災厄<sup>エンリョウ・イーター</sup>の魔獣》だろうが関係ないわ」

「はあ……」

有無<sup>うむ</sup>を言わせぬ強い口調でそう断言されると、竜司は言葉を濁<sup>にご</sup>すしかない。

思わず顔を背けてリリティカとこっそり目配せし合う。

（変わった奴だな……）

（はじめさんだねえ……）

竜司たちに対する、その他《救道者<sup>サブレス</sup>》たちの態度はおおむね淡泊<sup>たんぱく</sup>なものだ。

それは敵同士である以上仕方のないことだし、また当然のことである。だからこそ、その立場の違いを「関係ない」と断言する琴良のことが奇妙なものに感じられた。

（いやまあ……別に嫌<sup>いや</sup>じゃねえけどな）

複雑な心中を誤魔化<sup>ごまか</sup>すべく、竜司は揶揄<sup>やゆ</sup>するような口ぶりで琴良に言う。

「はは、クソ真面目なこった」

「なんとも言うがいいわ」

それに琴良はつんと澄ました顔をして胸を張る。

「これが私の生き方なの。誰に何と言われようと絶対に曲げないわ。七つの世界を巡<sup>めぐ</sup>る間に学んだ、大切なことだもの」

「うん？」

「え？」

七つ？

「お前、救った世界は六つとか言ってなかったっけ？」

~~~~~ つつ!! ~~~~~

途端、琴良の顔色が真っ赤に染まる。

顔を見合わせる竜司とリリティカ。

微妙な空気が流れる中、琴良は裏返った声で取り繕うように叫ぶ。

「うううう、うるさいっ！ 六つよ！ 救ったのは六つなの!!」

「どういことだよ」

「琴良ちゃん、もしかして算数苦手なの?」

「数くらいちゃんと数えられるわよ! バカにしないでくれる!」

竜司とリリティカから好き勝手に茶々を入れられて、琴良は一人で取り乱す。しかし、しばらくするとしゅんと沈んでしまう。

そして、観念したようにぼつりと言うことには。

「笑いたきゃ笑いなさい……私は、失敗したのよ」

「あ?」

「え?」

「私は……最初に招かれた異世界を救えなかったの」

そこから琴良は、観念したように自身の苦い過去を語るのだ。

『こんなはずじゃ……なかったのに』

闇の渦巻く高い塔の頂上で、琴良は唇を噛み締めた。

目の前には、一人の男が舌舐めずりをして琴良のことを見つめていた。

人の形をした、されど人ならざる者だ。優男然とした風貌だが、その肌は病的に白く、また愉悅の形に歪められた口元からは、ぬらりと光る牙が覗いている。細められたその赤い瞳に浮かぶのは、嗜虐と侮蔑の入り混じる、どす黒い感情だった。

この男が、この世界……レルニルを手中に収めんとする吸血鬼族の悪しき王。

そして、琴良が討つべき敵だった。

聖剣に選ばれし者として、琴良は異世界レルニルに招かれた。

そこで琴良は旅をして腕を磨き、仲間を集め、ついに最後の戦いに臨んだのだった。神の化身とされる聖剣クラウソスを得て、さらにその最終奥義も会得した。

琴良と仲間たちは万全の状態で敵の居城に乗り込み、破竹の快進撃を見せつけ……。

その結果、惨敗を喫してしまった。

王はあまりに強かった。

琴良たちの攻撃は見えない障壁に阻まれ一切通じず、桁違いの魔力によって繰り出される様々な魔法によって、一人、また一人と仲間たちが倒されていった。最後に残った琴良もまた王にろくなダメージを与えることも叶わず、ただ戮り殺されるただけに、気力だけで立っているような有様だった。

深い絶望を抱き、琴良は捨て身の特攻を覚悟した。

しかし王が巨大な闇を練り上げた魔力の塊を放ったその時。

「私の目の前に、その人が現れたの」

琴良の目の前に、いつの間にか人影が立っていた。

一枚のほろ布を頭から被<sup>かぶ</sup>っただけの、大柄でも、小柄でもない人影。手には燃え盛る紅蓮<sup>くれない</sup>の炎を宿した、美しい銀の剣。

そしてその人影は、驚く琴良に目もくれず、たったひと振り。上段から浴びせた、その洗練された一太刀<sup>ひとたち</sup>のもと、琴良に迫っていた魔力の塊ごと王を斬り捨ててしまった。

王の断末魔<sup>だんまつま</sup>が轟<sup>とどろ</sup>く中、啞然<sup>あぜん</sup>とする琴良に、その人影は振り返ることもなく。

『悪いがこの世界……俺が救わせてもらったぜ』

たしかにそう言ったのだ。

それは琴良が異世界に招かれて以来久々に耳にした、地球の、日本の言語だった。

「……………うーん」

「……………にゃはーあ」

琴良の告白に、竜司とリリティカが気の抜けた声を上げた。

それに琴良はムツと顔をしかめてみせる。

「何よ、夢でも見たんだろうって言いたいの?」

「いんや。うん。多分違うから……うん」

「???」

項垂<sup>うなだ</sup>れてしみじみと呟<sup>つぶや</sup>く竜司に、琴良は不思議そうな顔をする。

そこにリリティカが慌てたように口を挟<sup>はさ</sup>んだ。

「そ、その助けてくれた人は、それからどうしたの?」

「……ちゃんと顔を確認する前に、また気付いたらいなくなっていたの。仲間たちはみんな気を失っていたものだから、誰も信じてくれなかったわ。おかげで手柄は私のものになって、私はその世界では救世主として有名なのよ」

誇らしいはずのその言葉を、琴良は苦々しい口調で語った。  
だが最後には強い笑みを浮かべてみせる。

「でも、この島に招かれたのは幸運だったわ。この島にはすべての《救道者<sup>サブレス</sup>》が集められているんでしょ? 私を助けてくれたのも、十中八九《救道者<sup>サブレス</sup>》だわ。あの人もきっとこの島のどこかにいるはずなの」

「なるほどなるほどー」

リリティカがうんうんと食い気味で相槌<sup>あいづち</sup>を打つ。竜司も顔を上げ、呆<sup>あき</sup>れた調子で問いかける。

「つまりお前はそいつを探し出して借りを返したいんだな？　なんとも苦勞なこった」  
「……はあ？」

その言葉に琴良は目を丸くする。そしてその顔は次第に、ありありとした不機嫌色に染まっ  
ていくのだった。

竜司が疑念を抱く中、琴良は忌々しげに口を開く。

「なんでそんな発想に至るわけ……？」

「え、だってお前ってかなり義理堅い方じゃん？　俺にだってきちんと筋を通してくれるし」

「それとこれとは話が違うわ！」

力強く言い放つ琴良だった。

その目には根強い怒りだか恨みだかの真っ黒い炎が宿っていた。

ぎゅっと握った拳を天に掲げ、琴良は吼える。

曰く。

「私はその炎の剣士を見つけ出して……一発ぶん殴ってやりたいだけよ!!」

「なんでっ!」

予想外すぎるその言葉に、竜司とリリティカがそろってツツコミを入れる。琴良はそれに大  
真面目な顔で答えるのだ。

「だってあの世界を救うことは私の使命だったのよ？　それなのに横取りされて、不完全燃

焼ったらないわ」

「いやでも……そいつが現れなきやお前、結構危なかったんじゃないかねえの？」

「ご心配なく。劣勢をひっくり返せるような切り札ならあったの。だからこそあんな場面で邪  
魔されて……本っ当に最っ悪なのよ!!」

心底不本意だとばかりに眉を蹙め、琴良は握りしめた拳をわなわなと震わせる。

「私は手柄を奪ったそいつを探し出して、一発殴って……あの時助けてもらわなくても十分勝  
てたってことを、嫌というほど分かせてやるのよ……ふ、ふふふ……泣いて謝ったって許さ  
ないわ……」気が済むまで私の強さを思い知ってもらうんだから」

殺意全開の微笑みを浮かべる琴良だった。世界を救った英雄というよりも、そこにいるのは  
単なる復讐鬼のようである。

竜司とリリティカは冷や汗をダラダラと流しながら、こっそりと目配せし合う。

そして竜司はきこえない咳払いをして言う。

「え、えーっと……だったら聖討会に当たりをつけてみるのが一番の近道かもな」

「……せいとうかい？　生徒会じゃなくて？」

聞き慣れない単語らしく、琴良は殺意を潜めて首を傾げる。

それに竜司は淡々と説明を行うのだった。

「聖討会、聖なる討伐の会、俺たちを殺すために作られた、学生主導の組織さ。な、リリティカ」

「う、うん。一種の部活とか、そんな感じだよ。腕に覚えのあるひとが集まって、色んな仕事をしてるよ。逃げちゃった《災厄の牙》を探したり」

「ああ……化野先生が言っていた有志ってその人たちのことなのね。うんうん。強い《救道者》が集まっているのなら、あの人もその中にいるかもしれないし、所属していなくても、噂くらいは聞ける可能性があるわね」

琴良は目を輝かせて二人の話に食いついてみせる。

だが、竜司は「でも一筋縄じゃないだろうな」と苦笑する。

「《救道者》には個人ブレイを好む奴が圧倒的に多いからさ。バカみたいに強いくせして、聖討会に所属してない奴も結構いるんだわ。ま、とりあえずその百難会長にでも聞いてみるよ。《原初の七人》の一人さ」

「げん……何よそれ」

「《災厄の魔獣》に挑んで俺たちを捕獲した、最強クラスの《救道者》。化野先生とか、あとこの学園長とかがそうだぜ」

「へえ……まあ、何にせよ手掛かりにはなるわ。もつとその聖討会について教えないよ」

「おう、いいぜ。ちょうど——」

刹那、場には走るの、純然たる殺気だった。

言葉を切り、竜司は動く。

リリティカと琴良の二人を瞬時に小脇に抱え。

「ちよっ!? 何するのよ!」

琴良の抗議の声にも構うことなく、助走もつけず、地面を力一杯蹴りつけて鉛直方向に高く高く跳躍する。風を切って舞い上がり、やがて百メートルほどの高度に到達したその瞬間。

三人の元いた場所が火山のように爆発した。檻樓と化したレジャーシートの残骸と舞い上がる砂塵が竜司たちの高度まで届き、琴良が小さな悲鳴を飲み込んだ。

竜司が目を見つくと、土煙の向こうにそこに微かに二つの人影が見えた。小さく揺らめく二つの影は言いしれぬ不気味さを湛えている。

そのあとは重力に従う自由落下だ。

体制を崩すことなくまっすぐ落ちる竜司に向けて、琴良が声を張り上げる。

「何!? 一体何事なの!」

「多分、あれが聖討会の奴らだよ」

「いつもいつも、ご苦労さまだよねー」

間一髪、重箱を片付け抱えて守りきったリリティカが、気楽そうに呟やいた。

### 三章

## 魔獣討伐

「よっと」

竜司はリリティカと琴良を抱えたまま、元いた場所から少し離れた地面に難なく足から着地する。

その頃にもなれば土煙も次第に晴れていき、現れた敵の姿をようやく拝むことができる。

敵は二人。綾神学園の制服に身を包み、そろって竜司とリリティカのことを睨みつけている。

一人は男子生徒だ。金に染めた髪を短く刈りそろえ、獅子のような気高い雰囲気漂わせている。もう一人は女子生徒。制服の上にパーカーを羽織っていて、フードの下から覗く髪は萌黄色。感情の浮かばない整った顔立ちと、眠たげなジト目が特徴的だった。

そして男子生徒の制服の胸元には、聖討会の証であるエンブレムが飾られていた。

共に、竜司にとっては見慣れない顔ぶれだった。

恐らくこうして少人数で仕掛けてきたのは初めてなのだろう。

「来い！ 神槍ティース！」

男子生徒が駆け出して、力を持った言葉を紡いだ。



瞬間、空から銀の光が飛来する。その光は男子生徒の手に吸い寄せられ、硝子<sup>ガラス</sup>を砕くような澄んだ音を立て、たしかな形に鍛え上げられる。

それはゆうに五メートルを超える、一本の長槍<sup>ながやり</sup>だった。刃の先端は三叉<sup>さんさ</sup>に分かれており、支える柄<sup>え</sup>には微細な装飾が施され、白銀のような美しい輝きを放っている。

「我が槍<sup>や</sup>の露<sup>つゆ</sup>と消えよ!!」

男子生徒は一瞬のうちに距離を詰め、竜司めがけて鮮烈な突きを放ち――

「ざーんねん」

それを、竜司はほんの少しだけ体の軸<sup>じく</sup>をずらすことで軽く避ける。

虚しく空を切る刃先。男子生徒はしかしそれも予想の内なのか、顔色をわずかに変えることなく体を回転させ、竜司の体を薙<sup>な</sup>ぎ払うべく槍を振るう。

すべて、洗練された技能が垣間見える体運びと、隙<sup>ひま</sup>のない猛攻<sup>もうこう</sup>だ。

さらに《救道者<sup>サブレス</sup>》としての身体能力のおかげか槍の付加する力によるものかは知らないが、人間の域を軽く超えたスピードをも有している。常人の目ならば彼の動きを、残像ですら捉え<sup>とら</sup>えることなどできないだろう。

「いやあ、でも相手は俺<sup>おれ</sup>だしね？」

自分の目前までに迫った槍の柄を、竜司は縄跳びのように飛んで回避する。

そして着地した竜司の眼前に、また槍の先端が迫り……。

「だあから当たらねえってーの」

今度は上半身を後ろに反<sup>そ</sup>らせて回避。

我ながら実に鮮<sup>あざ</sup>やかなあしらいぶりだった。そう、気を緩めた瞬間。

「!?」

頬<sup>ほ</sup>にわずかな痛みが走ったかと思えば、視界の端で小さな鮮血の華が宙に踊っていた。

だが、きっちり今の攻撃は避<sup>よ</sup>けたはず。

竜司が素早く視線を前に戻すと、男子生徒は不敵な笑みを浮かべ、再度の突きを放つべく腰を深く落とした瞬間だった。

薄い危機感に突き動かされるようにして、竜司は脚に力を込めて後方に飛びすぎる。

その刹那<sup>せつな</sup>、竜司がいたはずの空間に、白銀の槍が突き刺さった。

これもたしかに回避できた。だがその槍の刃先から何かの力が放たれる。それは空気を切り裂く破裂音のようなものを上げて、まだ空中にとどまる竜司めがけて襲い来る。

《禍<sup>グラトニ</sup>の紡織衣<sup>ニ</sup>》!!

間一髪、リリテイカが展開した闇色の障壁<sup>しょうへき</sup>に阻まれて、その気配は音もなく消失した。

そこでようやく竜司は着地し、距離を取ったまま相手と睨<sup>にら</sup>みあう。

痛いほどの緊迫感と静寂<sup>せいじやく</sup>が場を支配する。

気温が下がり、四肢<sup>しし</sup>に絡<sup>から</sup>みつくような重々<sup>おもおも</sup>しさが漂い始め、風も怯<sup>おび</sup>えたように啼<sup>な</sup>く。



男子生徒は大きく足を開いて腰を落とし、いつでも攻撃に移れるように槍を構えた。それを警戒しつつも、竜司は皮肉な笑みを向けて挑発する。

「は、なかなかやるみたいじゃ——」

「ちょっと待ったああああ!!」

しかし、突如としてそれを遮る声が上がった。

視線を落とすと、小脇に抱えたままでいた琴良が猛獣のような目で竜司のことを睨んでいた。「当然みたいな流れで私を巻き込まないでくれる!? いい加減に放しなさいよ!」

「ああ、悪い悪い。忘れてたわ」

竜司は大人しく琴良と、ついでにリリティカを解放する。

するとその様を見ていた男子生徒が、不審な目を琴良に向け詰るよう言う。

「貴様は何だ、《災厄の魔獣》に加勢するつもりか? そのつもりなら容赦は——」

「そんなわけないでしょ!!」

琴良はそれをびしやりと斬り捨て、男子生徒を睨みつける。

「私はただの見学者よ。だから後は好きにして頂戴」

なんとも冷たい言い草だ。竜司は苦笑いを浮かべる。

「酷いじゃねえか。さっきまで仲良く喋ってた仲だろ」

「それはそれ、これはこれよ。今回は槍使いみたいだし、きっと私の探してる人じゃないわ。」

だからもう《災厄の魔獣》は用無しなの。ま、せいぜい見学させてもらおうわ」

「じゃあね、琴良ちゃん! これよろしく!」

「はあ……?」

リリティカから重箱を押し付けられて、琴良は苦い顔をするのだが。

「……食べ物粗末にしちゃいけないものね」

そう、諦めるように呟くと重箱を大事そうに抱えて、琴良は竜司たちから離れていく。用無しだと言ったわりに親切だった。

ともあれ竜司とリリティカは、心置きなく《災厄の魔獣》として再び敵に相対する。

「さて、再開というじゃねえか。ひとまず名前だけでも聞いてやるよ、ザコども」

「はっ……」

竜司の挑発を、男子生徒は笑い飛ばすだけだった。

余裕たっぷりの獣の笑みを浮かべ、堂々と名乗りを上げる。

「高等部二年、《蒼狗騎士》四ヶ峰直政だ」

それに、いつの間にか彼の隣に立っていた女子生徒が無表情のまま。

「高等部一年、《剪定尻》散崎登です」

一片たりとも感情の滲まない、冷えた声で言い放つ。その瞬間竜司はかすかな違和感を覚えて顔をしかめた。

(……なんだ、この匂い?)

譽が口を開くと同時、ほのかな甘い匂いが竜司の鼻腔をくすぐった。気取られないようさりげなく周囲の様子を窺うも、それらしき匂いの元は見当たらない。そうこうしている内に甘い匂いは消え去った。

首を捻りつつも竜司は意識を戦いに戻し、刺すような視線を送る二人に問いかける。

「直政と譽か。聖討会だと見ない顔だな?」

「私たちは本日、聖討会に仮入会しましたです」

それに譽が淡々と答える。完全な無表情のまま。

「なーんだ、新人りかよ。たった二人で俺たちに挑むとはいいい度胸で——」

「この度は私たちの力量を図る試験として討伐任務を執行させていただきました。少人数ではありますですが、四ヶ峰さんは高等部二年A組、私は高等部一年A組と学年は違えど、共にA組所属ですゆえ、貴殿が言うような力量的には問題ないかと思えます。ご理解いただけますか?」

「お、おう」

譽の正論に、竜司は頷くほかなかった。

S組に劣るとはいえ、A組もトップクラスの实力者が揃っている。たしかにそれが二人もいるとなれば、相手にとって不足なしで……退屈しないで済むだろう。

「よって、よろしく絶命してくださいです」

最後に譽はそう言って、ぺこりと頭を下げてみせた。無表情のまま。

なんとなくやりにくさを感じつつ、竜司は頬の傷にそっと触れてみる。痺れるような感覚もないし、皮膚を切り裂く程度のかすり傷だ。

竜司はその血を親指で乱暴に拭い、直政と譽に笑ってみせる。

「まあ、なんでもいいさ。この俺に、久しぶりに自分の血を見せてくれたんだ」  
そして血に濡れた指でビシッと地面を指し示し、告げてやる。

「たっぷりと礼はさせてもらうぜ」

ホームラン宣言ならぬ、返り討ち宣言である。

それにリリティカが「きゃー!」と黄色い声を上げて竜司に軽く抱きついてみせる。

「りゅーくんさっすが! かっこいいねー!」

「はっ、当たり前すぎて賛辞にや物足りないな」

「たしかに! じゃあじゃあ、ちゅーしてあげようか?」

「それは間に合ってる」

「なんだとー!」

ふざけ合う竜司とリリティカ。

それは相対する者の闘志を削ぐか、殺意を増長するようなやり取りだ。

だが、この度の敵……直政も誉も動じることにはなかった。  
直政は距離を取ったまま呼吸を整え。

「つつだああああああああ!!」

その場で空気を大きく揺るがすほどの、音速の突きを放つ!

気合も勢いも、先ほどとは段違いの攻撃だ。

ただしそれももちろん、竜司たちからは遠く離れていて、空を突くだけのはず。

だがその槍が突いた点から不可視の斬撃がいくつも生まれた。それらの斬撃は竜司とリリティカめがけて、唸りをあげて襲い来る。

「あらよつと」

竜司はリリティカの手を引き、すべての斬撃を間一髪でかわす。

しかしそれで終わりではなかった。またも次の一波が放たれる。

一歩前に出て《禍の紡織衣》を展開しようとするリリティカを、竜司は片手で制する。

「これくらい俺一人で片付けるさ」

「そお?」

「ああ。だからお前は」

残りの一人を警戒してろ、と続けたその時。

「!」

竜司とリリティカの真上から巨大な影が差す。

見上げれば、二人の真後ろに土塊でできた何かが立っていた。足が短く手が妙に大きい、不格好な造形のゴーレムだ。体には苦悶の表情を浮かべた顔がいくつも浮かんでいて、声なく悲鳴を上げていた。

ゴーレムは土や雑草をボロボロと落としながら、リリティカに覆いかぶさるようにして迫る。その不気味な姿は、図太い竜司ですら嫌悪感を抱くほどだった。

そして、リリティカにとっては。

「iiiiiiiiいやああああ!! 《禍の紡織衣》 iiiiiiiiiii!!」

もう、生理的に無理だったらしい。

「ちよっ!」

竜司がリリティカの手を引く前に、リリティカは《禍の紡織衣》を紡ぎ上げる。  
《禍の紡織衣》に触れたゴーレムはその瞬間に力を失い、大きな音と地響きを立て崩壊し……。

「きやああああああ!!」

リリティカはその土砂を頭から被ってしまう。

あつという間もなく、見事な生き埋めだった。

目の前にできた巨大な山を見上げ、竜司は一瞬だけ呆気にとられてしまう。

「……っ! 何をやってんだバカ!!」

リリティカがこの程度で死ぬとは思えないが、さすがに放っておくわけにはいかない。  
竜司は山を崩すべく土砂をかき分けるのだが。

「思った通りだ!!」

その後から、直政が強烈な突きを打ち出してきた。

竜司はそれをまた軽く回避する。

「おっと」

だが、かわした瞬間に右の二の腕がほんの少しだけ切り裂かれた。

「あの女の、忌々しい魔の障壁はあらゆる攻撃を無効化する! だが!! それで無に帰すことができるのは異能の力のみ! だからこそ、それ以外の、力を込めた物体自体は消し去ることができる!……!」

「明察」

すべて直政の言う通りだ。

リリティカの《禍の紡織衣》は万能に見えて、実は穴がいくつもある。

異能の力を無に帰すことができて、単純な槍での攻撃や土砂といった形のある物質はそのまま残ってしまう。その証拠に、昨日の集会で受けた何百本もの剣の雨も、剣に込められた聖なる力を消し去ることができただけで、呼び出された剣そのものはグラウンドに散らばる結果になっていた。

「だが力が一か所でも《禍の紡織衣》に触れば、その力すべてを消せるつーエゲツなさなんだぜ? すげえだろ? 褒め讃えてくれたつーいいんだぜ?」

「あの障壁は貴様の力ではないだろう。それをどうして貴様が誇る」

「何をほざくかと思えば」

攻撃を巧みに避けながら、竜司はニヤリと笑ってみせる。

「あいつは俺の片割れだ。あいつの力も思いも、すべて俺のもんだ。だから《禍の紡織衣》も俺の持つ力のひとつなんだよ」

「はっ! 言っている!」

槍で仕掛けられた足払いを、竜司は軽いステップでかわす。

だが槍が空を切ると同時に、制服のズボンが何箇所も切り裂かれた。また不可視の攻撃だ。鬱陶しいことこの上なく、竜司は反撃に出ることにした。

目指すは無論、直政の懐だ。長物を相手にする場合は定石の手。

直政が槍を大きく振り切ったタイミングを見計らい、無防備なその懐に潜り込む。

「掌底です」

しかし真横から突如現れた壁のようなものによって、竜司は思いっきり吹っ飛ばされた。

何度か地面を転がった先で竜司が見たのは、地面から生えた土塊の腕だった。先ほどリリティカが無効化したゴーレムと同じもの。あれに強烈な平手打ちを受けたのだろう。

その少し向こうから、譽が無感動な面持ちでやってくる。

「これまでの戦闘記録から、『禍の紡織衣』の有効範囲は術者を起点として直径約四メートルの半球と推測されるです。よって」

譽はリリテイカが埋まっている、土砂の山を指し示す。

直政との攻防によって、竜司はその山からかなり離されてしまっていた。

「盾を足止めして、剣を引き離せば勝ち筋が見える……です」

「はは。ザコにしちゃ中々やるじゃねえか」

たしかにこの距離なら『禍の紡織衣』は届かない。

今の竜司は最強の盾という庇護を失ったことになる。

だが、竜司は譽の言葉に、ただせせら笑うだけだった。

「しかし土使いなんつー地味な能力で、ここまで俺を楽しませるなんてな。褒めてやるぜ」

「害獣に贅辞を頂戴するとは驚愕するです」

「こいつの言葉に耳を貸すな」

直政がわずかな苛立ちを滲ませて譽を睨みつけ、竜司に向けて槍を構える。

「その余裕がいつまで持つか！ 魔獣よ！」

そう叫んだ瞬間、またも竜司の腕や足が何箇所も切り裂かれた。

鋭い小さな痛みが走り、生ぬるい血が伝う嫌な感触が肌を侵す。

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「さげすむと、いや、かんじよく、おかしな感じがする」

「う、うるさいッ！ 普通の相手ならば、肉も骨も区別なく切断せしめるはずなんだ……！」  
 「つまり俺の素の丈夫さが優ってるってわけか」

竜司が納得の顔で直政をしげしげと見つめる。その緊張感のない様が腹に据えかねたのだらう。直政は一瞬だけ憤怒の表情を浮かべるが……それはすぐに不敵な笑みに一変する。

「好きなだけほざくがいいさ。打つ手の尽きた手負いの獣など恐れるに足らず」

「手が尽きただあ？ 昨日の集会みたく、全て吹き飛ばしてやってもいいんだぜ？」

「丸腰の貴様に何ができる。女がいなければ、あのデタラメな剣は出せないのだから」

「あは……」

これまた凶星である。竜司は少し引きつった顔で笑ってみせる。

たしかに竜司だけではあの大剣……アウスレーゼを呼び出すことができない。

その反応に、直政は獠猛な笑みを浮かべて叫ぶのだ。

「手下の《災厄の牙》すら呼べぬ哀れな獣よ！ 今こそ貴様の死ぬ時だ！」

直政が槍を携えて駆け出してくる。種も明らかとなつた、皮膚しか傷めない攻撃とはいえない鬱陶しいことに変わりはない。だから竜司はひとまず大きく距離を取ろうとするのだが。

「逃がさないです」

「うおっ」

響の声に応じるようにして、地面から土塊の腕が何本も生えてきて竜司の足を捕らえた。

まるで地獄の底から生者を引きずり込もうとする、この世ならざる悪魔の腕だ。

「うおお気色悪い……」

少し殴りつけてみると、土塊の腕はあっさりと碎けてしまう。だが所詮は土塊。少々形が崩れてもすぐに復活するし、次々と新しい腕が生まれては竜司に絡みついた。リリティカではないが、たしかにこれはいいい気がしない。

そうこうするうちに直政がもう目前に迫っていた。

身動きが取れないままに槍で突かれれば、さすがの竜司も無傷で済むはずがない。

絶体絶命。

打つ手はすべて尽きてしまった……ように見えた。

「……仕方ねえか」

だから竜司は、ほんの少しだけ本気を出すことにした。

呼吸を整え、目を瞑る。

思い描くのは、自分の力だ。

かつて得た数多の力の、ほんの一部分。

竜司は右の拳をしっかりと握りしめて。

「必殺……！」

自分の足元を、ほんの少しだけ気合を入れて殴りつけた。

「フレイトファイスト  
神覇滅拳」

竜司を中心として空気が引き寄せられ……次の瞬間、周囲の地面が炸裂し、途轍もない爆音が世界を揺るがした。

水面に琴良が落ちたように、竜司を起点として凄まじい衝撃の波紋が広がった。衝撃波はいくえく幾重にも疾駆し地面を抉り砂塵を巻き上げ、ゴーレムたちや間近に迫っていた直政と誉を諸共に吹き飛ばした。二人の悲鳴を掻き消すほどの烈風が荒れ狂い、しばし嵐のような喧騒が場を支配した。

そして風が収まったのち。

「ふー」

嵐の後には、見渡す限りに巨大なクレーターができていた。

その中心で竜司は一仕事終えたような顔で立ち上がる。

周囲を見渡して、自分の拳を見つめ、そしてニヤリと満足げに頷く。

「ま、こんなもんだろ」

「りゅーくんの、バカー!!」

「ふぶっ!」

そんなふう浸っていると、思いつき横つ面を殴られた。グーで。

見ればリリティカが肩で息をして、竜司のことを睨みつけている。先ほどの一発でリリティ

カが埋まっていた土砂もついでに吹き飛んだので、脱出することができたのだろう。だから

竜司としては感謝されても、殴られる道理はないはずだ。それが痛くもなんともない攻撃であつたとしても。

「なんだよ、俺のおかげで出てこれただろうが」

「やり方が乱暴すぎるの!」

竜司の抗議に、リリティカはブンブンと分かりやすく憤慨する。

「おまけに本気まで出しちゃってもう! アウスレーゼで戦う以外は禁止って約束でしょ!」

「他に手はなかったんだよ。考えなしに《禍の紡織衣》を使って生き埋めになったバカには、とやかく言われたくねえな」

「そうだとっても、ちょっとは加減してくれてもいいでしょ! おまけに見てよこれ! 芝生が全部ふっとんじやつたじゃない! せつかくステキなお昼寝スポットだったのに、これじゃあ台無しでしょ!」

「知らねえよ。明日になりや、誰かが元通りに直してくれてるだろ」

どうどう、とリリティカを宥める竜司だが。

「!?」

鋭い殺気を感じて身がかめると、その瞬間、凄まじい勢いで竜司の頭上をしなる鞭のような何かが通過した。

いつの間に接近していたのやら。琴良が回し蹴りを放った瞬間だった。  
 翻るスカート。白くて弾力のある太もも。そして。

「パンツ見えてんぞ」

「なっああああああああ!!」

慌てて飛び退き、顔を真っ赤にして竜司を睨みつける琴良だった。

竜司は呆れ返って琴良に半眼を向ける。

「見せてくれるんならありがたく見るけど……お前、もうちょっとお淑やかにできないわけ?」

「あんたねえ……! 私まで巻き込んでおいてその言い草は何!? 死ぬかと思ったわよ!!」

「でも死んでねえだろ?」

「結果論で語るな!! 過程を謝りなさい!!」

琴良は目を吊り上げて激怒する。髪はぼさぼさで残念な感じだが、しっかりリリティカが託した重箱を抱えて守ってくれているあたり真面目である。どうやらそのせいで足技しか使えなかったらしい。

「まあまあ、お前らひとまず黙ってろ。俺はまだやることがあるんだよ」

恨みのこもった眼差しを向ける琴良とリリティカを押しのけて、竜司は一歩前に出る。

はるか遠くのクレーターの端に、ふらふらと立ち上がる直政が見えた。酷い傷はなさそうだが、制服のあちこちは擦り切れ、その顔には色濃い驚愕と畏れのような感情が滲んでいる。直

政の隣には誉が座り込み、竜司のことを値踏みするかのような目で見つめていた。

どちらからも、最初のような燃え盛る闘志は感じられない。

だから竜司はわざと挑発するように言っている。

「こちとらもう半年も《救道者》どもに命を狙われてるんだ。得物がなけりや戦えないなら、もつと早くに殺されてるだろ。舐めんじゃねーよ」

「嘘……だろっ!」

直政が蒼白な顔色で絞り出すように叫ぶ。

「封印は!? 封印はどうなってるんだ!」

「効いてるっつーのもちろん」

「……っ!?」

竜司の言葉に、直政は絶句する。

「封印……?」

琴良が怪訝な顔で呟き、それにリリティカが得意げな顔で説明する。

「この島全域にはね、わたしとゆーくんが出られないようにする封印と、力を制限する封印がかけられているの。その要が学園施設の地下にあるものだから、校舎の中で戦うのはご法度なんだよ」

「ふうん……制限ってでも、具体的にどれくらいなの?」



「なあに、しけたもんさ」

竜司は琴良にニツと無邪氣に笑ってみせ、単なる事実を突きつけてやる。

「俺たちの力を、たった千分の一の力に抑えるだけだ」

「なっ!？」

今度は琴良も直政と同じように絶句する。

先ほどの無茶な一発は、竜司の秘めた力のほんの一端が現れたにすぎないのだ。七つの世界の修羅場をくぐり抜けた琴良ですら信じられないとばかりに目を丸くして、竜司のことをしげしげと見つめる。

そこに更にリリティカがしたり顔で補足する。

「しかも今の一発。りゅーくんにとっては、その千分の一の全力ですらないからね?」

「まったく……つくづく化けモノね、あんたたちって」

「はっはっは、そう褒めるなよ」

朗らかに笑う竜司に、リリティカは唇を尖らせ不満を顕わにする。

「でもでも本当にあんまり無理はしないでね?」

「なあに、お前が心配するほどのことはやんねーよ」

「むう……」

なおも不満そうにふてくされるリリティカだったが、それ以上は何も言おうとしなかった。

「おい、もう一度行くぞ!!」

竜司たちがそんなやり取りを繰り返す中、直政の聲が響き渡る。

ふらつきながらも槍を構え、最後に残った闘志を無理やりに燃やす直政。

しかし、側の誉はゆるゆると首を振る。

「無理だと思っす」

「何故だ!？」

「あの害獣の力量は測り知れませんです。それに、今回聖討会から私たちに課せられた任務は『害獣を相手取り、力を見せる』とのことです。だから十二分にその任務は果たして——」

「もっいいい……!!」

直政は槍を振るって誉の淡泊な言葉を遮った。

「貴様と組んだのは聖討会からの指令があったからだ……! こうなったら俺一人でもやってやる!! 魔獣をあそこまで追い詰めることができたんだ! 俺は強い! だから俺はこのまま魔獣を殺して……俺は……!!」

そう叫び、直政は槍を高く掲げる。するとその先端に渦巻く水流が生まれた。水は次第に大きさを増し、うねりを上げて何かの形を成し始め……。

《蒼呂揺蕩いし尊き王》……………」

直政の声と共に、水は甲高い澄んだ音を立てて凍りつき、一匹の龍へと変容する。

空高く嘶くその氷龍は見上げんばかりに巨大であり、太陽の光を受けて煌めく氷の鱗は名匠の鍛え上げた刃を思わせた。氷龍は蛇のような長い胴体をくねらせ空を駆け、氷柱の牙を振り翳し、竜司とリリティカに肉薄し……！

「だあめ♪」

だがその瞬間、リリティカが張り巡らせた《禍の紡織衣》に触れ、氷龍はビタリと中空で静止してほどなく重力に従い落下する。

そして辺り一帯に響き渡るほどの高く澄んだ音色を奏で、無残にも砕け散ってしまった。

『どうだ参ったか』とばかりに唇を舐めて、リリティカは呆然と立ち尽くす直政に微笑みかける。どうも生き埋めにされたことを根に持っていたらしいが、若干気は晴れたよう。

「もうやめようぜ？ これじゃあ消化試合もいいところだ」

そんな直政に、竜司は静かに語りかける。

直政たちが竜司に一瞬でもアドバンテージを取れたのは、リリティカという盾を無力化することに成功したからだ。それが今となつては盾の封印は解かれ、なおかつその封印の要となつた誓は戦意を失つてしまつている。おまけに同じ手は二度通用しない。

「俺は基本、去る者は追わない主義だ。《救道者》を殺すこともしない。例え一人でも殺しちゃったら、その他全員が捨て身でかかつてきやがるだろ？ 嫌なんだよ、そういう面倒くせえのは」

事実、竜司はこの島に連れてこられてからただの一人も《救道者》を殺めていなかった。だから降伏を促すのだが、直政は唇を噛み締めたままだった。

（参ったなあ……）

経験上、こうした手合いがそう簡単に諦めてはくれないことを、竜司はよく学んでいた。

自分が相手にするのは、異世界を身一つで救つてきた《救道者》なのだ。

多くの者が、心が折れかけても、それをバネにして立ち向かう芯の強さと、勇敢さを持ち合わせている。しかもそれは一対一の場合に発揮されることが多い。

多勢に無勢の集団討伐のような状況では、彼らは一人一人が没個性な兵となる。だが、強敵との一騎打ちともなれば話は違う。彼らはその時、紛うことなき救世の英雄となり、文字通り死に物狂いで竜司たちに立ち向かつてくるのだ。自分が倒れれば世界が減ぶという極限状況を経験した者にしかない、究極の強みだった。

（まあ……そうじゃなきゃ、俺たちが困るんだけどな）

竜司はそう、胸の内だけで言っていた。

すべては自分と、リリティカが望んだ通りに進んでいる。

《救道者》たちには、竜司たちを倒せるくらいに強くなつてもらわなければならない。

だからやるべきことなど一つだ。ここで徹底的に力の差を見せつけて、直政の心を折る。残酷かもしれないが、きっと彼はそれを持ち越え、今よりも更に強くなってくれることだろう。

これまで竜司とリリティカが倒してきた、他の《救道者》たちと同じように。

竜司はそのために、直政に向けて一步を踏み出す。だが。

「その通りよ」

それよりも先に、琴良が動いた。

「まったく……同じ《救道者》として見てられないわ」

琴良は重箱を足元に置いてから、一步、二歩、ゆっくりと直政に向けて歩み寄る。

背後から竜司たちの慌てる声が聞こえるが、気にしてなどいられない。

諭すような口調で直政に語りかけた。

「あなたたちは結構いいところまでこいつらを追い詰めたものだから、諦めるのは悔しいかもしれない。でもね、今日はもう無理よ。撤退だつて立派な戦術で——」

「うるさい……っ!!」

琴良の言葉を、直政はあらん限りの大声で遮った。

その目に浮かんでいるのは苛立ちと憤怒と……そして、絶望の涙だった。

「貴様はいいつらの味方をするのか？ 貴様は自由が欲しくはないのか？ 俺たちは《救道者》なんだ！ 異世界を救った英雄なんだぞ!? そんな俺たちがどうして……! どうして!!」

直政は世界を、すべてを恨むように慟哭の叫びを上げる。

「どうしてこんな島に、閉じ込められなければならないんだ!!」

「……っ」

それに、琴良は一瞬だけ言葉に詰まる。

だがすぐに頭を振って、言い放つ。

「私たちは《救道者》世界のために戦う力と、使命があるのよ。だから仕方のないことなの」この島には《災厄の魔獣》を封じ込め、弱体化させる特殊な術がかけられている。

そう、琴良は学園に来る前に聞かされていた。

術で守られたこの島は外部からの侵入を受け入れても、内部からの逃遁を決して許さない。一度島に入ってしまったら、『魔獣の討伐』という演目が終わるまで《救道者》たちは舞台を降りることすら許されない。

だから魔獣を倒すまで、誰もが卒業できない。自由を手にはできない。

それが、綾神学園だ。

琴良はそのことを覚悟した上で、この島にやってきていた。

炎の剣を持ったあの《救道者》を見付け出すために。

そして何よりも、力を持った人間としての使命を果たすために。

「知ったことか……!!」

だが、そのことに《救道者<sup>サブレス</sup>》の全員が納得しているわけではないだろう。かつての栄光の日々とは異なる、島での軟禁という処遇<sup>しよくう</sup>に不満を抱く者は少なくないことくらい、琴良にはよく理解できていた。

「俺は自由が欲しい……！ 聖討会に入会を希望したのだから、メンバーは島の外に出られるからだ!! だが、それは学園の任務を行う間という、仮初め<sup>かりそ</sup>の自由にすぎない! 魔獣を倒さぬ限り、真の自由は得られない!!」

ある者は使命感から《災厄の魔獣<sup>エンフィロイスクイ</sup>》を憎み。

ある者は自由への渴望<sup>かつぼう</sup>から《災厄の魔獣》を恨む。

よくできたモチベーション付加だと琴良は思う。

直政は後者の一人なのだ。その身から痛いほどの怒りを滲ませながら、ゆっくりと白銀の槍を構える。荒い呼吸をすつと整え、体の重心をわずかに後ろに移す。彼を取り巻く空気が、白く霞<sup>かす</sup>んだようにほけや始めた。

「俺の邪魔をすると言うのなら……貴様諸共、魔獣を倒してやる!!」

直政の周囲に突如として何十本もの氷柱が出現する。

円柱型の巨大な氷柱は、すべてがその鋭利な先端を違<sup>たが</sup>うことなく琴良に向けていた。

「《蒼海君臨せし狂狗》」

「!!」

琴良が身構えると同時、氷柱が矢のように放たれた。

素早く後ろに飛び退き先陣<sup>せんじん</sup>を回避するのだが、なおも多くの氷柱が降り注いでくる。高く澄んだ破碎音<sup>はさいおん</sup>は処刑<sup>しよく</sup>を告げる鐘のように残酷な響きを有していた。

破片が頬を掠<sup>かす</sup>める中で。

（仕方ないわね……っ!）

琴良は愛剣を呼び出すべく、右手のひらに力を込める。

すぐ目の前には氷柱の先端が迫りつつあった。それでも十分に間に合うことを琴良は培<sup>つちか</sup>った経験で、肌で理解していた。だが結局、その手に剣を生み出し振るう機会は訪れなかった。

「お前、やっぱりバカだろ?」

「なっ……!?!」

目の前に立ちはだかった背中に、かつての苦い記憶<sup>きおく</sup>を思い出してしまったから。

嫌な予感に駆け出して、見事間髪<sup>かんぱ</sup>もなかった。

竜司は琴良の目の前に滑<sup>すべ</sup>り込む。そして琴良を背中に庇<sup>かば</sup>いつつ拳を握り、今まさに降り注がんとする氷柱の大群に向けて突き上げた。

「砕ける!!」

拳は空を切り、鋭い烈風を巻き起こし、氷柱すべてを砕き尽くした。竜司はほっと息をつく。

季節外れの電が舞う向こうに、啞然と立ち尽くす直政が見えた。

竜司の背中に庇われたまま、琴良が声を震わせて叫ぶ。

「な、なんで今回も助けるのよ!! あんたは私たちの敵……《災厄の魔獣》なんでしょ!!」

琴良はひどく戸惑っているようだった。噛みつくような叫びには不安のようなものが滲んでいる。竜司はそんな琴良を振り返り、苦笑を浮かべてみせるのだ。

「なあに、変なのはお互い様だろ。それに……」

本当に《災厄の魔獣》なら、どれだけ楽だったか。

竜司の小声のつぶやきに、琴良が目丸くする。

その刹那だった。

重い衝撃が竜司を襲い、視界の隅で大きな鮮血の華が咲いた。

琴良の大きな悲鳴が上がる中、一拍遅れ、脳を抉るような痛みが竜司を襲う。

「ぐ、ううっ……!!」

視界が霞み、脳を埋め尽くすのは、猛烈な苦痛と吐き気と血の臭いだ。自分の心臓の鼓動が痛いほど耳につく。それに合わせておびただしい血液が零れ落ち、竜司の足元に血溜まりを作った。

混濁する意識の中、竜司は歯を食い縛って耐え、自分の体を見下ろす。

「うっ……わ」

自分の脇腹から血塗れの何かが生えていた。周辺に舞う電と同じ煌めきを持った、白銀の槍。その槍をしかと握んで体を支え、竜司はただ、前方にいる人物を睨む。

「か、はっ……セコいことしやがって……!!」

「は……ははは……!! 敵から目を離れた貴様が愚かだったまでのこと!!」  
目と鼻の先、至近距離で、直政が鬼のような形相で笑いながら立っていた。

今しがた竜司を貫いた槍をしっかりと両手で握り締め、直政は壊れたように笑い続ける。

「はははは!! 魔獣の分際で情けを出すとはな……!! 女! お前のおかげで魔獣が討伐できる! 魔獣は貴様を庇い、そして死ぬんだ!!」

「……っ!」

竜司に庇われたまま、琴良が短く息を呑む。

それは達成感とは真逆のものであった。痛いほどの後悔。悲しみ。

《救道者》としては失格の、だが人としても温かな感情。

背中に感じるそれらの感情を、竜司は受け取った。理解した。

だがそれを、《災厄の魔獣》として認めるわけにはいかなかった。

「誰が、誰を庇ったってえ……!!」

だから、竜司は囁く。

「直政の獲物を仕留めた高揚感を、ぶち壊しにかかるのだ。」

「勘違いするんじゃないやねえ!! 《救道者》同士の小競り合いなんてケチで醜い小芝居が気に入らなかっただけだ! 興が削がれるだろうがよお!」

「興だと……!?」

「ああそうだ!! 興だ!! すべては余興だ!! 俺たちがどうしてこんな島で、てめえらの遊びに付き合ってると思うっつ!」

竜司は血反吐を吐き捨て、醜悪に嗤う。

「楽しいからだよ! 俺たちの足元にも及ばねえザコどもが、世界の命運だの大義だのを語って、群れて、挑んで、悩んで、そして最後に俺に叩きのめされて絶望する! 俺たちはそういう一流の喜劇を見るために、わざわざ手を抜いて、てめえらと遊んでやってるんだ!!」

竜司は怒鳴りながら、腹から生えた槍からそつと右手を離す。

そして、流れるように後ろに引いて。

「だから同士討ちなんつー楽しくないことをされるとな……観客としちゃ困るんだよ!!」

「出でよ! アウスレーゼっ!!」

駆け寄ってきたリリティカと、ほんの一瞬だけ手を触れ合う。

そして振り上げたその右手には、一振りの大剣……アウスレーゼが握られていた。

直政は驚愕の面持ちで竜司の身体から槍を抜く。そうして応戦しようとするのだが、つんぬめるようにしてその動きが止まった。地面から生える土人形の腕。それが直政の足首をしかと捕らえていた。

「散崎……!?」

「よくやっただす、四ヶ峰さん」

やや離れた場所で誉が、さも残念そうに首を振る。

「ですが……こうなつては用済みなのは貴方の方です。ご苦労様でした、です」

詮が無くなったせいで、これまで以上の勢いで竜司の腹からボタボタと血液が流れ出る。常人ならば気を失うどころか、とうに絶命している出血量だ。噤せ返るような血臭で意識を手放しそうになる中で、竜司はただがむしやりに踏ん張って。

「根性入れ直してから出直しやがれ!!」

アウスレーゼを横薙ぎに振り抜いた。

肉を叩く嫌な感触とくぐもった悲鳴。土人形の破碎音。

それらを残し、直政が勢いよく吹き飛んだ。構えた槍と共に何度も地面を転がって、ようやく止まった先でうつ伏せになり、あとはピクリとも動かない。

竜司はそれを確認して、ようやく力を抜くことができた。アウスレーゼから手を放し、自分の作った血溜まりに頭からぶつ倒れる。微睡みに沈みそうになる中。

「し、しっかりしなさい!!」

すぐに悲鳴のような声で叩き起こされた。

琴良が血溜まりに膝をついて竜司を抱き寄せ、必死に呼びかけてくる。

「これくらいなら医療所まで行けばきつとすぐ治るわ! だから……!!」

「無駄だっつーの……」

「どうしてよ! まだ助かるわ! 諦めるなんて許さないわよ!」

この島には、あらゆる世界の科学と魔法を集結させた医療施設が存在している。腕が吹き飛ばす程度の怪我なら一瞬で元通り治療することが可能であり、どんなに半生半死の有様だろうと死体でない限りは半日程度で歩けるようになるという。

だから琴良の主張はわかるのだが……それは《救道者》たちにとっての理屈だ。竜司はかすれた声で笑い飛ばす。

「バーカ……俺はお前らの敵の、《災厄の魔獣》だぞ……死んでなんぼの化けモンを、どこの誰が……治療してくれるって言うんだよ……」

「っ!」

本気でそのことに思い至らなかったのか、琴良が息を呑む気配がした。

《救道者》としてはあまりにお粗末だ。竜司は琴良を見上げてせせら笑う。

「だい、ち……おまえ……さつき俺に、死んでこい、とか言ってたろ……が」

「事情が変わったの!! 庇われたままで、借りも返せないままに死なれてなるもんですか!!」  
「め、めちゃくちゃな《救道者》だな……ああ、制服……返してもらってすぐ、ポロポロになっちまって……悪かったよ」

「そんなことどうでもいいわよ!! いいから黙ってなさい!!」

そんなやり取りをする最中も、竜司の傷口からは血がとめどなく流れている。よくもまあ尽きないものだ、場違いな感心を抱いてしまうほど。

「バカだねえ、りゅーくんは」

そこに、呆れたような声がかかる。気力を振り絞って視線を向ければ、リリティカが腰に両手を当て、ため息をついて自分のことを見下ろしていた。

「わたしを抱えて、琴良ちゃんのところまで走ればよかったんだよ。それをどうして一人で突っ走っちゃうかなあ。そしたらムタに怪我することもなかったのに」

「……うるせえよ」

悪態を返してみるが、リリティカの言うことももつとどった。

気付いた時には何も考えずに飛び出していたのだ。先ほどヘマをして生き埋めになったリリティカの浅慮を笑えない。だから琴良に抱きかかえられたまま、竜司はそっぽを向く。

「でもね、そんなバカなりゅーくん……カッコよかったよ」

「ぐっあ!! お、お前っ……!」

リリティカが竜司の側にしゃがみ、その傷口にそっと手を重ねる。

苦痛に呻く竜司だが、血の混じる唾を飛ばして叫ぶ。

「バカ！ やめろ！ この程度、ほっときゃそのうち塞がる!!」

「おとなしくしてね」

リリティカがゆっくりと目を瞑ると、長い銀の髪がふわりと浮かび、その体からほのかな光が溢れ出す。短く息を呑む琴良。竜司はそれを見守るしかない。

厳かな、それでいて心が安らぐようなその光は次第に竜司の傷口に流れ込み、竜司は痛みが格段に引いていくのを感じて……苦々しい思いで目を閉じる。

「おーわりっ」

そして、それは唐突に終わってしまう。竜司が目を開いて起き上がった時には、リリティカの体を包んでいた光も、脇腹に空いていたはずの風穴も、すべてが嘘のように消えていた。それどころか、戦いの最中できていた無数の裂傷ですら跡形もない。貧血気味で頭がぼーっとするくらいで、ほとんど全快だ。

「お前なあ……」

「さっきりゅーくんだってアウスレーゼ以外の力を使ったでしょ。だからおあいこだよ」

抗議を込めた目でリリティカを睨んでみるが、さらっと正論を返されて竜司は黙るしかない。ただ、その光景に納得のできない者が一人いた。

琴良だ。あんぐりと口を開いて、リリティカのことを穴が開くほど見つめている。

「あ、あなた、その力は一体……ってか、何よその耳!？」

「ありや」

琴良に指摘されて、リリティカは自身の耳を髪でいそいそと隠す。

長く尖った、人ならざる者の証である、その耳を。

目を丸くする琴良と、苦い顔をする竜司とに、リリティカは舌を出してウインクしてみせる。

「バレちゃった」

「ほらな……だから止めたんだよ」

竜司は諦めつつも頭を抱える。そこに琴良が絞り出すように尋ねてくるのだが。

「あなた……一体何者なの……?」

「えっへん、実はですね!」

リリティカは胸を張って、訝しむ琴良に告白する。

「とある世界で、女神をやっていたものです☆」

「……………は?」

結果、滑ったような空気が流れた。

固まる琴良に、竜司は痛む頭を押さえながら懇願する。

「あ……とりあえず黙ってくれ。な? それでさっきの貸しはチャラだ」



「うっ……わ、分かったわよ」

貸しはチャラ、という言葉に釣られるようにして、琴良は渋々頷いた。しかし何かに気付いたとばかりにハッとして竜司に詰め寄る。

「い、いや!? それだけじゃないわ! あんた確かさっき言うってたわね? 本当に

《災厄の魔獣》だったら云々って……あれは一体どういうことよ!?」

「え……俺そんなこと言ったかな?」

「言ったわよ!! どういうことだかさっぱり説明しなさい!」

「なんのことだかさっぱりだわ」

眉を吊り上げ追及する琴良から、竜司は逃げるように視線を逸らす。

その視線の先で、リリティカが呆れ返ったような顔をして竜司のこを見つめていた。

(何を口滑らせちゃってるのさ)

(いや、なんつーか……絶対聞こえないと思ってたんだよ。どんな地獄耳だよ、こいつ)

そんなふうにはリリティカと目で会話しつつ、竜司は話を変えようとするのだが……。

「そっかだ……!?」

すっかり忘れていたもう一人の襲撃者を警戒して、その姿を探す。

だが、誉はもうすでに辺りのどこにも見られなかった。

逃げ足の早い奴、と竜司は苦笑し……ふとした疑問が浮かぶ。

(あいつ……なんだって最後、仲間の邪魔をするような真似をしたんだ?)

怒鳴りつけられて腹が立ったのだろうか。その動機に思いを巡らす竜司だったが。

「あらあ〜? もう終わっちゃったのお〜?」

間延びした声と共に、緩んだはずの空気が一転して冷え切ったものとなる。

いつの間にか、倒れた直政を見下ろすようにして一人の少女が立っていた。

ゆるくウェーブのかかった髪を腰まで伸ばした、肉感的な体つききの美少女だ。軍服じみたコートを通すことなく羽織り、同色のベレー帽を頭にちょこんと乗せている。足元を飾るのは高いピンヒールの編み上げニーハイブーツ。豊かな胸元には直政と同じエンブレムが飾られていた。

そんな彼女は竜司たちに向けて手を振り、朗らかに笑うのだが。

「おんにちはあ〜《災厄の魔獣》たち。ご機嫌いかがあ〜」

迷わず竜司は地面に転がるアウスレーゼを掴み、少女めがけて駆け出した。

風よりも速い俊足で間合いを詰め、思いつきアウスレーゼを振りかぶり――

「ざあんね〜ん」

思いつき空振りして……背後から首に両腕を回される。

背中にかい乳房が押し付けられる感触。

耳元には生温かい吐息といき。甘ったるい香水こうすいのような匂いが鼻腔をくすぐった。

魅惑みわく的なはずのそれらの感覚は、ゾツとするほどに作り物めいていて、竜司の背中を冷たい汗が伝う。竜司はその腕をふりほどき、アウスレーゼを振り向きざまにまた思いつきり振った。しかし、それも見事に空振りに終わってしまう。

「いやねえ。あたしにそんなの当たるはずないって、分かってるくせにい」

声を頼りに姿を探すと、すでに少女はリリテिकाと琴良のすぐ側に立っていた。

わずかな風や足音など、何の気配も見せることなく少女は自由自在に移動する。

それが彼女の特技だと分かっている……竜司は苦虫を噛み潰つぶしたような表情を浮かべるしかない。

「……一体何をしにきやがった」

「そう殺氣立たなくていいわよ。今日は別の用事があつてきただけだからあ」

少女はのほほんと云つてのけるのだが、竜司は警戒を緩めない。リリテिकाも眉を顰ひそめ、少女に疑いの眼差しを向ける。ただ一人先日島にやつてきたばかりの琴良だけが、彼女のことを知らないらしく首を傾かしげて突然の闖入者を見つめていた。

そんな琴良に、少女が目丸くして微笑みかける。

「あらまあ、初めましての子がいるわねえ。もしかして、あなたが転入生の館宮さんかしらあ？」 いきなりS組に入ってきたという」



「え、えと……そうですけど。貴女はどちらさま？」  
 「あたしは聖討会の、高等部三年S組《虚数立体》こと百雅伽藍よ。《原初の七人》なんて呼ばれたりもするわあ」

「なっ……!?」

少女——伽藍の告げた言葉に、琴良は言葉を失ってしまう。

それは先ほど竜司たちが語っていた、聖討会トップの名前だ。

言いしれぬ緊張感が場を支配する中、竜司は噛みつかんばかりの敵意を込めて伽藍を睨む。

「で……別の用事ってのはなんなんだよ」

「新入りの実力を見にきたんだけど……どうやら遅かったみたいねえ」

そう言つて、伽藍は遠方に転がる直政を見やる。しかしすぐに首を傾げて唸るのだ。

「あらあ〜？ おかしいわねえ〜。たしか、今回の試験は二人だったと思うんだけどお〜」

「ああ。あとの一人なら逃げたみたいだ」

「そお〜。不利になったらちゃんと逃げるなんて偉いわあ〜。戦況判断ができてる証拠ねえ〜。

でも、仲間を見捨てて逃げるのはマイナスかなあ〜？」

そうばやきつつ、伽藍は直政にすっと人差し指を向ける。

「とりあえず〜。医療所までひとつとびい〜」

そしてくるり、と空中に円を描いた瞬間。

空間が揺らぎ、ほんの少しだけ気温が下がり。

直政の姿がその場から幻のように掻き消えた。

「えっ!?」

琴良が驚きの声を上げる。

それに伽藍は悪戯っぽい笑みを向けて得意げに言うのである。

「あら、驚いたあ〜？ あたしの得意技は空間操作なの。瞬間移動はお手の物なんだからあ〜」

「は、はあ……なるほど……」

先ほどの竜司をあしらった時のことを思い出してか、琴良は納得の表情を浮かべる。

百雅伽藍の持つ力は、数ある《救道者》の中でもあまり類を見ないものだ。空間を繋げる程度は朝飯前で、新しい空間を生み出すことすら可能である。

竜司は一仕事終えた伽藍に、しつしと追い抜くように手を振ってみせる。

「終わったならとっとと帰れよ。それとも、ここで俺のとどめを刺しておくつか？」

「それもいいかもしれないけどお〜」

伽藍は血まみれで立つ竜司のことを、先ほどと変わらない微笑みを浮かべたままで見つめ返す。親愛を感じるはずのその笑みは、獲物を求める毒蜘蛛のような危険な香りを放っていた。

ほんの数秒の睨み合いによって、二人の間に息詰まるような緊迫した空気が生じる。

だが伽藍は不意にリリティカを見やっつてから、肩を竦めてみせるのだ。

「やめておくわあゝ。一号くんが本調子じゃないから、二号ちゃんがビリピリしてるんだものおゝ」

「賢明な判断だよ。つか、その呼び方やめろつてーの。いつも言ってるだろ」

「ほんとだよ！ ちゃんとリリティカ様って呼んでよね！」

「ええゝ、だったらあたしのことも、伽藍さまって呼んでほしいかもおゝ」

伽藍が緊張感のかけらもない笑顔を見せて、竜司はこっそりと胸を撫で下ろす。

今ここで伽藍を相手取ったところで、竜司は負ける気がしない。これまで何度も刃を交えたが、全戦全勝を取めている。だが、あれだけ血を流したせいか、伽藍の動きに対処しきれなかったのもまた事実だ。そんな調子で易々と勝てるとも思えなかった。

空気がほんの少しだけ緩む中、伽藍が周囲の血溜まりを指さして琴良に問いかける。

「ところで館宮さゝん。これ、どんな戦いだったか教えてくれるかしらあゝ？ 新入りさんは善戦したみたいだけどおゝ」

「え、えつと……」

突然話を向けられて琴良は戸惑いながらも、手短にその顛末を語ってみせた。

すると伽藍は顎を撫でながら、深々と嘆息して言う。

「ふうん……つまり、貴女を庇って、一号くんは危なくなつたつてわけなのねえゝ？ 思わ

ぬ収獲つてやつなのねえゝ？」

しばらく伽藍は竜司たちと琴良、そして地面に刻まれたクレーターと血溜まりを熱心に見比べていたが、やがて一人でうんうんと納得顔で頷いて。

「決めたわあゝ。決めちゃったわあゝ」

伽藍は琴良に、その華奢な右手を差し伸べる。

「貴女はきつと魔獣討伐に一役買ってくれるに違いないわあゝ。貴女さえ良ければ、『災厄の魔獣』討伐に最適な特別寮に住んでみる気はなあゝ？」

「え……？」

ぽかん、と口を開いて琴良は固まる。

「あの、何か誤解されているみたいですけど、私は何もやっていませんよ？」

琴良がやったことと言えば距離を取って観戦していたことと、最後の最後で巻き込まれたことくらいだ。ちゃんとその辺りも琴良は取り繕うこともなく説明していた。

戸惑う琴良に、伽藍は追い打ちをかけるように語るのだ。

「四ヶ峰くんに、貴女が勇敢に立ち向かったからこそ、一号くんは怪我を負ったんじゃない。そういう因果あゝ？ 流れえゝ？ そんな不確定要素を味方につけるのも、センスの一つだと思ふのよおゝ。それに貴女、骨があるみたいだしゝ。因みにその寮にはあたしも入つて、強くてすごい人はいつでも募集中なのおゝ。だ・か・ら」

伽藍は琴良に顔を近づけて、にっこりと微笑む。

「このお話、受けてくれないかしらあ〜?」

「え、えっと……その……」

琴良は応え辛そうに、竜司とリリティカの様子を窺う。

その顔には『助けてもらった恩を仇で返すことにならないかしら』という葛藤が滲んでいた。

「……うん?」

その葛藤はすぐに『でもさっき貸し借りはチャラになったはずだし』という揺らぎに変わり。

「……………百難先輩」

「なあにい〜?」

「その寮にいるのって……強い人ばかりなんですか?」

「ええそうよお。聖討会の人間でも、そうそう入れないんだからあ〜」

伽藍の言葉で、琴良は満面の笑みを浮かべる。今日で一番輝く笑顔だった。

その笑顔は、『そこに行けば炎の剣士の情報が得られるかも?』という期待に満ちていて。

「そのお話! 受けます!!」

「あらそお〜? 嬉しいわあ〜」

琴良はガシツと伽藍の手を握り返すのだった。

あまりにスムーズなその流れに、竜司とリリティカはそろって面食らってしまうのだが、す

ぐに二人とも我に返って琴良に声をかける。おずおずと。心配そうに。

「え、あの。お前、それ……いいの?」

「琴良ちゃん……ちよつと考え直した方が……」

「いいに決まってるでしょ! 百難先輩! どうぞよろしくお願いします!!」

「うふふ。じゃあ、善は急げで、行きましようかあ〜」

「はい!!」

琴良は先を行く伽藍に続こうとして、最後にそつと竜司を振り返る。

その顔に浮かんでいたのは、昨日の集会で見せたような真剣な表情で。

「……次に会った時、色々聞かせてもらうわよ」

そう言い残し、琴良は伽藍と共に去っていく。

残された竜司とリリティカは、ただ顔を見合わせて。

「次に会った時……かあ」

「わりと……早く会えると思うよね」

釈然としないながらも、二人の背中を見送るのだった。

## 四章

## 仄かな疑惑

一年前のその日、少年は死んだ。

見渡す限り、どこまでも地獄の有様だった。

いくつもの煙がたなびき、空気には灰と土埃が入り混じる。

はるか遠くから鳴り響くサイレンの音、人の泣き叫ぶ声や、呻き声、誰かの名前を必死に呼ぶ声。それらが合わさり、不快な協奏曲を奏でていた。

それは突如起こった。

少年だけが外出していたその時間に、あの化けモノは現れた。

何が起こったかも分からなかった。

熱や光が空を舞い、建物や道路がまるで玩具のように潰されていった。地面は抉れ、あちこちでは破裂した水道管から水柱が上がっていた。天災と呼ばれるどんな現象よりも、ずっと悪意に満ちた破壊の様を目の当たりにして、少年は命からがら家へと逃げ帰った。

そして今、少年はたった一人で座り込んでいた。

目の前にはうず高く積み上げられた瓦礫がある。

鉄筋コンクリート建ての普遍的な、一軒家だ。

そして、少年が両親と暮らしていた家でもあった。

少年は瓦礫と化した家を見つめるだけだ。

家の中には父と母がいた。今、瓦礫の下には父と母がいる。

瓦礫を懸命にとかした末に見つけた二人は、すでに事切れた後だった。

少年は家族を守れなかった。助けることができなかった。

無力感が全身を支配し、怒りも悲しみも湧いてはこなかった。

ただ目の前に広がる光景に、唇を噛み締めるだけだった。

「……あ」

そんな時だった。

ひどく弱々しい声が、少年の耳に届いた。

遠くのサイレンや叫び声に掻き消されてしまうほどのか細い声。

「……あなたが」

少年が振り返った先には見たこともない少女が立っていた。

長い銀髪と空を思わせる澄んだ青色の瞳を持ったその少女は、外国の、それも民族衣装じみた純白の衣をまとっている。

少女は悲しみを湛えた瞳で少年を見つめ、必死に手を伸ばしていた。

『わたしの探していた人……!』

気付いた時、少年はその少女の手を取っていた。

理由なんてどうでも良かった。少女の目的だつて知ったことではなかった。ただ、助けを求める誰かを守りたかった。

見知らぬ誰かを守るくらいに強くなりたかった。

その時少年を突き動かしたのは、たったそれだけの想いだった。

「う……………う……………」

眩む意識。浅い微睡みから目覚め、竜司は呻く。そして考える。思い出す。

(えーっと……………あれからどうなったんだっけか……………)

直政と誓の二人を打ち破ったあと、竜司とリリティカは自分たちの住処へと戻って行った。

しかし帰り着いてすぐ、血を流しすぎたせいか猛烈な眠気に襲われて、血塗れの上着を脱ぎ捨てて、手近な場所まで横になった。そこから先は記憶がふつと途絶えている。

たしか談話室のソファで寝転んだ、と思う。

「あ、起きた?」

身じろぐとそんな声が頭上から降ってきた。目をこすりつつ体を起こすと、ソファの側にリリティカがべたんと座っている。ほんの少しだけ眉を顰め、リリティカは竜司に微笑みかけてきた。

「りゅーくん、うなされてたよ」

「……………ああそう」

リリティカの言葉にそつげなく返して、竜司は顔を背ける。

思い出した。さつきまで自分は夢を見ていたのだ。

そして、あれは野々柳竜司という少年が。

(俺が……………人として死んだ日だ……………)

竜司は無意識のうちに、拳を固く握りしめていた。血の気が失せて、白く冷たくなり始めたその手に、リリティカが自分の手をそつと重ねる。ただ包み込むように触れ合ったその手からは、優しい温かさが伝わってきた。それに加えて、ほんの少しの悲しみも。

リリティカは苦笑を浮かべて竜司を見つめる。

「いろいろ……………ごめんね?」

「何を今更」

竜司はリリティカの言葉を鼻で笑うようにして言う。

「俺は俺の好きなことをしているだけで、それが偶然お前の目的に合致していた。それだけだ」  
「りゅーくん……」

二人は口を閉ざして見つめ合い、しばしの静寂が場に落ちて――  
ぐうぐうぐう。

「おう……」

「あらま」

唐突に、竜司の腹が顕著な自己主張を始める。

バツが悪くなつて頭を掻きつつ、竜司は窓の外を見やる。差し込む光はすっかり茜色に染まつていて、騒がしかった今日という一日が、今にも終わろうとしていた。

竜司は肩を回しながら、リリティカに笑いかける。

「そろそろ時間だろうし、着替えて飯でも作るか」

「わーい！ 今日のご馳走？」

「まあ、そうなるかなあ」

きやつきやとはしゃぐリリティカに竜司は苦笑を浮かべ。

「ひよつとしたら客が来るかもしれないし」

そう、小声ではやくのだった。

ちようどその頃。

「いみがわからない……」

琴良は自分のスーツケースを引きずりながら、ひたすら、ひたすら歩いていた。あれから伽藍に連れて行かれたのは綾神学園高等部の職員室だった。

ほーっとコーヒーをすすっていた化野を描まえて伽藍が何やら耳打ちしたかと思えば、様々な書類にサインと判を求められ、簡単な地図と預けていた荷物を渡されて。

『やはり君は人一倍熱心な《救道者》だったのだな。精進したまえよ』

『あたしは用事があるから案内はできないけど、一本道だしすぐ分かると思うからあー』

『は……はあ』

手を振る二人に見送られ、琴良は一人その寮へと出立したのだった。

寮の名は、魔獣対策特別寮。

《救道者》の中でも一握りの実力者のみが住まうことを許される、特別な寮だという。

寮生は魔獣討伐における最大のチャンスと最高の支援が学園より与えられ、すべての《救道者》から畏敬の念を抱かれる……と、伽藍と化野はざっくりと説明してくれた。

綾神学園は島の北東端に存在する。そして、その寮は島の南西端にあるという。

「直線距離にして……約十五キロ……っ！」

《救道者》たる琴良にその程度の行軍が苦であるはずもないが、地図を見ながら見知らぬ土地



を長時間歩くとすると、さすがに疲労が溜まってしまふ。

島の中心部には修練場や娯楽施設、商店などが建ち並び、一種の地方都市を思わせた。しかし寮の方角に進むにつれて文明の匂いはなを潜めていき、気付けば鬱蒼と茂る林の中を歩いていた。時刻も夕暮れ時で、辺りには人どころか生き物の気配すらしない。だが地図が指し示すのはこの方角だし、申し訳程度とはいえ先に続く道も整備されている。

しかしそんな先にあるという寮である。あまり設備面では期待できそうもない気がする。水道も電気もガスも通っていない山小屋程度の粗末な建物を思い描き、琴良は気落ちする。「でもまあいいわ……それこれも、炎の剣を持った《救道者》を探すためよ！」

これから自分の住む寮は、ごくごく一部の実力者のみが住まうことを許されるという。設備はお粗末でも、そこに住んでいる人々は超が付くほど一級なのだ。

「だからきつと手がかりがあるはず……」百雍先輩に炎の剣士について聞くのを忘れたのは失策だったけど……あの人にはこれからいつでも寮で会えると思うし、その時間には完璧のはず！これはもう目標を見つけたも同然ね！」

一人きりで薄暗い森を歩き、自然独り言が多くなる琴良だった。

しかし、気になることは他にもある。

「野々柳竜司……か」

人類の敵……であるはずの存在。

だが、琴良はその事実に対して小さな疑惑を抱き始めていた。

敵であるはずの竜司は琴良のことを救ってくれた。それも二度も。

その上深手を負う寸前に、彼が呟いたおかしな独り言も気がかりだった。

助けたのはただの気まぐれ。または興醒めな光景に対する制裁……おおむねそんな言い分だったと思うが、それを丸つきり信じるほど琴良は素直でもなかった。

きつと竜司には何か秘密があるのだ。

寮まで歩く道中、琴良の頭の中はずつと竜司のことでいっぱいだった。

本当に、彼は邪悪な魔獣と呼ばれる存在なのか。

本当に、自分たちが倒すべき敵なのか。

ぐるぐる考え続けるも、答えが出るはずもなかった。

雑念を振り払うようにして琴良は足早に林の中を突き進み。

「あら……？」

気付けば、道の向こうに何やら開けた場所が見える。小走りで向かうと、そこで道と林は唐突に終わり広い土地が存在していた。学園のグラウンドほどもあるうかという広大なその土地の中心には、大きな家が一軒だけぽつんと建っている。

だが、そんなことよりも。

「なによこの……嚴重警戒は」

建物をぐるっと取り囲むようにして、大きな鉄製の柵が立っていた。柵には高圧電流を注意する看板が等間隔に掲げられ、物々しい雰囲気を出して見る者を圧倒する。まるで刑務所のような光景だ。

その他にもバイオハザードマークの立て看板やら、『「一」マークの道路標識、『この先日本国憲法通じず』などと書かれた怪しすぎる警告文などなど。建物の周囲は、ありとあらゆる注意勧告のオンパレードとなっていた。

「……道を間違えたのかしら」

だが地図をどう見ても、示しているのは紛れもなくこの場所で、伽藍も『一本道だしすぐ分かる』と言っていた。琴良は首を捻りつつ、柵の入り口をくぐって敷地内に侵入し、恐る恐る建物に近づいてみる。

真新しいその建物の敷地面積はとても広く、二階建てで玄関は一つだけ。電気のパネルがずらりと付いていて、外から見ると、どこまでも普通の家だった。

だが、建物に近づくにつれて肌がひりつくような威圧感が強くなる。

得体の知れないこの世ならざるものが建物の内部で蠢き、獲物を待ち構えているような……そんな感覚に襲われて、琴良はいつでも戦闘に移れるような気を引き締めた。

そして玄関の前に立った時、表札の存在に気付く。

「『魔獣対策特別寮』……」

どんぴしゃだった。

相変わらず妙な威圧感が漏れ出ているし、得体の知れない建物であることには変わりがない。しかし、ようやく琴良は合点がいつて気を抜くのだ。

「強い奴らが住んでるなら……この雰囲気も納得できるかも？」

何しろ《救道者》の中でも群を抜いた実力者が集まる場所なのだ。

世界を救う力ということは、世界を滅ぼしかねない力でもある。そんな中でも枠外に強い者たちが集まるのなら、この厳重警戒や重々しい雰囲気すべてに納得がいく。

（そうよ！ 私の第一の目的は炎の剣士を探すこと！ 今はあいつのことなんて一旦忘れて、こっちに集中しなきゃ！）

琴良は脳内の竜司を追いついて、決意新たに寮を見上げる。

これから自分が住むはずの、そして炎の剣士の手がかりがあるかもしれない場所。果たしてどんな出会いがあって、どんな経験を積むことになるのだろうか。

期待と不安の入り混じる中、琴良は意を決し、寮に向かって叫ぶのだ。

「たのもー！」

しーん。

何秒待っても、返ってくるのは静寂だった。

どうしよう滑<sup>すべ</sup>ったか。琴良は不安に苛<sup>さいな</sup>まれつつ、もう一度叫んでみる。  
「えっと……すみませーん！」  
しーん。

たっぷり一分待ってみても、返ってくるのはやはり静寂だけだった。

今度は大きく息を吸い込んで、あらん限りの大声で叫んでみる。

「あー!! 新しく入寮<sup>にゅうりょう</sup>することになった、館<sup>あめみ</sup>宮です! どなたかいらつしやいませんか!」  
すると、ようやくドタバタと近づく足音が聞こえてきた。

ホッと胸を撫<sup>な</sup>で下ろす琴良の目の前で、寮の玄関が開かれて。

「悪い悪い、待たせたな。ちよっと手が放せなくてさ」

「……………は？」

平然と顔を出したその人物を前にして、琴良は完全に凍<sup>こ</sup>りつく。

動きやすいシャツとジーパンに、何故かエプロンを装備した少年。

それは紛<sup>まぎ</sup>れもなく、先ほどまで自分の脳内の大部分を占<sup>し</sup>めていたはずの……竜司だった。

言葉を使い固まる琴良を、竜司は立ち話も何だからと寮の中……寮生のための談話室だとい  
う部<sup>へや</sup>屋に通してくれた。

大きめのテレビやソファ一式、観葉植物の鉢<sup>はち</sup>やマガジンラックなどの家具がバランスよく配

置されており、なおかつ掃除が行き届いた広い部屋。空調も照明もほどよくて、なかなかいい  
環境<sup>かんきやう</sup>だった。

「この談話室は共有スペースだけど、二階には一人ずつ個室があるんだ。普通の学生寮<sup>がくせいりやう</sup>は二  
人で一つの部屋だから、それを考えると破格<sup>たいはく</sup>の待遇<sup>たいぐ</sup>だな」

「……………はあ」

寮について説明し始める竜司のことを、琴良は冷や汗<sup>あせ</sup>をかきつつも半眼で見つめる。

あまりのことに驚<sup>おどろ</sup>いて言われるままに上がってしまったものの、現状がさっぱり理解でき  
てはいなかった。

何故こんな場所に《災厄<sup>エンフリオ・イタクト</sup>の魔獣》である竜司がいるのか。

魔獣対策特別寮<sup>うそ</sup>というのは嘘<sup>うそ</sup>なのか。

ぐるぐる考え込み、琴良は一つの可能性に気付く。

ばつとその場から飛び退<sup>の</sup>いて、竜司から距離を取るべく壁際<sup>かきぎわ</sup>に逃<sup>に</sup>げる。

「まさか……! あんた、この寮の《救道者<sup>サブレス</sup>》たちを始末したんじや……!」

《救道者<sup>サブレス</sup>》の中でも指折りの強者<sup>きやう</sup>たちが魔獣を倒すべく集<sup>も</sup>う寮である。  
彼らからしてみれば目ざわりなことこの上ないだろう。

「は? なに言っただ、お前」

しかし、竜司は半眼で首を捻<sup>ひね</sup>るだけだった。

それが本気で理解不能といった表情だったので、琴良はうろたえてしまう。

「だ、だったらどうしてこの寮にあなたがいるのよ!? おかしいでしょ!」

「逆に聞きたいんだが……お前、もしかして聞いてねえの?」

竜司が頭を掻きながら、琴良に告げるのは。

「ここ、俺とリリティカも住んでるんだけど?」

そんな爆弾発言だった。

一瞬だけ、確実に時間が制止した。

「どういうことよおおおおおおお!」

そして一瞬の後、琴良は絶叫して竜司の胸倉に掴みかかる。

取り乱す琴良に対して、竜司は心底哀れな目を向ける。

「どういうこともなにも……伽藍と化野先生、何も教えてくれなかったのか?」

「お、教えてくれたわよ!! すっごく強い《救道者》が集まる寮で、魔獣討伐への最高のチャンスと支援が与えられる場所だって……まさか、嘘だったの!」

「いや、それは正しいんだけど。他には何か言われたか?」

「あとは……この寮生は、すべての《救道者》から畏敬の念を抱かれる、とかなんとか」

「なんだ。全部ほんとのことじゃん。若干うまく伝わってなかっただけで」

ははは、と気楽そうに笑う竜司。だが、それを見て琴良は妙な胸騒ぎを覚えた。

「若干……?」

「ああ。魔獣討伐への最高のチャンスってのはそりゃ、簡単な話だ」

竜司は親指で自分のことを示し事もなげに言う。

「俺たちと一緒に暮らしてれば、いつだって好きに殺れるだろ?」

「ぐつつ……!」

たしかに、生活空間の方が学校よりも隙が生まれやすく、討伐には適した環境となるだろう。監視する意味合いも含めて、一つ屋根の下での共同生活は理に叶った話かもしれない。

だが、突飛すぎるにも程がないだろうか。君子危うきに近寄らず、という昔の偉い人の言葉を鼻で笑うような暴挙だった。虎穴に入らずんば虎児を得ず、とも言うものの。

頭を抱える琴良に対して、竜司はさも当然とはかりに補足する。

「畏敬の念ってのは『うわあ……あいつ頑張るなあ……』っていうドン引きかな。一週間以上持った奴がこれまでで伽藍しかいねえからさ。誰も入りがらないんだよな」

「ああ……あの入しやうだしね……う、うん? ちょっと待って今聞き逃さないこと言ったわね!? 一週間以上持ったのが百難先輩しかないなら……つまりこの寮って——」

「俺たち《災厄の魔獣》の二人と、《救道者》は伽藍しか住んでねえぞ」

「なっ……!?」

つまり、あの先輩はたった一人で《災厄の魔獣》二体を相手取りこの寮で暮らしていたのか。琴良は伽藍の底知れない強さに戦うとともに、同時にほんの少しだけ安心感を覚えた。この寮にたとえ《災厄の魔獣》二人がいたとしても、そんな実力者たる伽藍がいるとなれば心強い。

二対二ならまだなんとかやっているといる気もするし……。

そう安堵する琴良に、竜司が「でもよ」と補足する。

「伽藍は聖討会の諸々で忙しいみたいなんだ。おかげで滅多に帰ってこなくて、この家は俺たちの貸し切り? 独占? みたいな感じでさあ」

二対二、ではなく二対一だった。

戦況は絶望的だった。

「帰るわ!!」

「やめといった方がいいと思うぞー」

荷物を抱えて踵を返しかけた琴良に、竜司がのんびりと声をかける。

「この寮、日没とともに全部の窓と出入り口がロックされるんだよ。無理に壊して外に出ると、島中に警報が鳴り響く仕様でさあ。前に寝付かなくて外の空気を吸おうと思ってドアを破壊した時なんかよ、もう一瞬で実力派の《救道者》どもに囲まれてて——」

「もういいわ……」

気力も尽きて、その場にへたり込む琴良だった。気付けばもう窓の外は夜の藍色に染まり始めている。いくらなんでも転入初日から島全体を騒がすような問題を起こすわけにはいかないだろう。

沈む琴良の肩を、竜司は励ますように叩いてやる。

「まあ、そんなに嫌なら明日学校に行って化野先生に言えよ。明日は土曜だけど、あの人多分学園にいると思うからさ」

「えっ……そ、その……」

願ってもないはずの言葉に、琴良は心の底から頷くことができなかった。

ここには炎の剣士についての手がかりを求めてやってきたはずなのだから、《災厄の魔獣》しかないような魔窟だと分かれば用はないはず。早々に逃げるのが最も賢い手段と言える。だが、琴良はその賢い選択に迷うのだ。

言葉に詰まりつつ、琴良は竜司の顔をちらっと見やる。

本当に彼が《災厄の魔獣》と呼ばれる存在なのか。一体どんな秘密を抱えているのか。

それについて知りたいと思う気持ちが増え、琴良は突き動かされるようにして口を開く。

「……私言ったでしょ。次に会った時にいろいろ聞かせてもらって。あんたたちは、一体何を隠しているの?」

「さあね」

すると竜司は苦笑いしつつ肩を竦めてみせるだけだった。

まぎれもない誤魔化し。だが、それは同時に秘密を抱えていることへの肯定でもあった。夜間に沈む外の静寂が寮の中にも伝染して、言いしれぬ緊迫感が満ちていく。

「そう……分かったわ」

琴良は小さく頷き、ゆっくりと立ち上がる。

ここまできて大人しく引き下がるつもりなど、毛頭なかった。

「野々柳竜司!!」

琴良が声を張り上げた瞬間、周囲の空気が爆発的な熱を持ち、渦巻く気流へ変貌する。突然のことに竜司は目を丸くしてたじろいだ。その動揺を、好機を逃すことなく琴良は続ける。竜司の鼻先にびしっと人差し指を突きつけて、宣言する。

「私と勝負なさい!! それで、私が勝ったら秘密を喋るのよ!!」

「は……?」

「りゅーくん。お風呂掃除終わったよ……え、なにこの空気?」

ひよつこりと部屋を覗き込んだリリティカが、のほほんと首を傾げた。

◆試読版はここまでです。続きは「世界の敵の超強撃!」本編でお楽しみください。